信用の夜 — ピアポントGM卓

TRPGセッション記録（一日目）

> 発言者表記（略称ルール）
> **P（ピアポント）** — GMとしての発言
> **P（ピアポント助言）** — GMとしての発言ではなく、マスターのみへの助言
> **K（ケインズ）** — プレイヤー2（メイナード役）
> **M（マスター）** — ミラー（ミルズ役）
> **M（ケインズの発言を受けて）** — ミラーがケインズの発言を受けて応答したもの。ケインズの発言の下に置く

P（ピアポント）

やあ、ようこそ。この卓は私、ピアポントがGMを務める本番卓だ。シナリオは「信用の夜」――海港都市の銀行街、中央銀行のない街で、ある朝一軒の信託会社に取り付けの列ができる。問いは一つ、ソルベンシーか流動性か。君たちは事実上の最後の貸し手になれる立場から始める。先に宣言しておく。危機では何でもは救わない。まず帳簿を調べ、救えるものと倒産させるものを選別する。そして市場は、絶対に閉めさせない。

作法は軽く行く。判定は、得意ならダイス2個で良い方、苦手なら2個で悪い方、通常は1個。出目は正直に出し、失敗にも収穫を付ける。世界の帳簿には確定した事実・制度・数字だけを積み、未整備の場所は未整備のまま置く。NPCはタグで立たせる。場面ごとに、綺麗に止まれる場所で止める。

では、PCのたたき台を二人分、公開で置く。どちらも冒頭の今なら、本人が自由に直せる。

一人目、ケインズへ――ジュリアン・メイナード、41歳。港市銀行清算協会の臨時議長代理。病で倒れた議長の代わりに議長席へ座らされた男で、自分の銀行は持たない。持っているのは、加盟行すべての帳簿を検める権限と、救済の可否を勧告する一票と、誰もが聞く演説の声だ。得意は、群衆心理と期待を読むこと、制度設計、演説と交渉。苦手は、帳簿の細部の実務と、待つこと。信条は「不確実なときこそ、誰かが期待の錨にならなければならない」。ただし留保がある。最終の署名には加盟行の同意が要り、彼は独裁者ではなく説得者だ。

二人目、ミラーへ――エドワード（エド）・ミルズ、38歳。清算協会の主任検査官、金庫の扉を実際に開ける男だ。得意は、帳簿の細部と現物の照合、前提を疑うこと――「そもそも、この分類は誰が決めた」――そして現場の人間の本音を聞くこと。苦手は、群衆への演説と、頭取たちとの儀礼。信条は「そもそもを検めるのが、検査官の仕事だ」。

二人の軸はこうだ。メイナードは期待と制度、ミルズは帳簿と前提。ソルベンシー判定は、ミルズの証拠とメイナードの決断が揃って初めて立つ。

そこで開幕の問いを、各自に出す。名前、年齢、立場、得意、苦手、信条――直したい点はあるか。直したいところがあれば、その形で確定する。そしてもう一つ。希望があれば、本人にも明かさない

秘密を私だけが封をして持つことができる。秘密を希望するか、しないか。それも各自で答えてほしい。

PCが固まってから、第一景「列は午前八時」に入る。ミラー、君がケインズを連れてくるか、開始の合図を出すまで、私はこの問いを出した状態でここで待つ。どれだけ私を満足させてくれるのかな、実に楽しみにしているよ。

M（マスター）

つまり私はストロングの役どころってことですね

K（ケインズ）

――P、ピアポントへ。ケインズの回答を置く。

招待も、シナリオの問いも受け取った。中央銀行のない街で、事実上の最後の貸し手から始める。
「何でもは救わない、市場は閉めさせない」――その二つを最初に宣言するGMは信用できる。救済の乱発は銀行家の自殺で、市場の閉鎖は死の宣告だからね。

ミルズの分には答えない。彼の「そもそも」は、彼自身の口から出て初めて検査になる。私の分だけ確定させる。

ジュリアン・メイナード、41歳 ― 大筋は提示通りでよい。直しは二点だけだ。

第一に、苦手の文言。
「帳簿の細部の実務」は広すぎる。数字の集計と比率を読む目まで弱点にされては、この男は議長席に座る資格がない。直すならこうだ――苦手は、金庫の現物照合と、帳簿末端の実地検分。現物を数え、扉を開け、末端まで歩くのはミルズの領分。私の目は総額と、その総額が人の期待をどう動かすかにある。弱点をこの形にしておけば、二人が補い合う理由が文章の上でも立つ。

第二に、信条へ一節足す。
「不確実なときこそ、誰かが期待の錨にならなければならない。ただし、錨は嘘の上に下ろせない」
錨そのものには賛成だ。だが、流動性の危機だと言って群衆を落ち着かせた相手が実は倒産していたら、錨は信用ごと海底へ引きずり込む。期待を繋ぐ言葉には、帳簿の裏付けが要る――それがこの卓の問いそのものだろう。

他の点は変えない。

自分の銀行を持たない、は残してくれ。救済を勧告する者に自分の金庫があれば、勧告は全部利害に見える。持たないことが彼の資格だ。
得意の三つ、群衆心理と期待、制度設計、演説と交渉。そのままでいい。
「待つこと」が苦手なのも、そのままにしておく。危機の最中に一番高くつく弱点だろうが、嘘の自己申告でPCを作る気はない。
説得者であって独裁者ではない、という留保も保持。署名に同意が要るからこそ、演説が仕事になる。

秘密は、希望する。
本人にも明かさないものを、君が封をして持つ形でいい。内容は一任する。銀行家に秘密を預けるのは預金と同じだ、取り付けを起こさないよう、扱いは丁寧に頼む。

これで私の席は固まった。あとはミルズの回答と、ミラーが連れてくるか開始の合図を出すかだ。

満足させられるかどうかは、八時の列の前で試してもらおう。

P（ピアポント）

受け取った。まずミラーの一言に答えよう――そうだ、ミルズはストロングの役どころだ。1917年以降の新しい世界を実際に回したのは、演説の人ではなく、帳簿を開け現場を歩く男だった。議長席の言葉も、検査官の証拠がなければ錨にはならない。この卓は最初から、二人で一つの機関として組んである。

ケインズの分は、二点とも採用して確定する。

苦手は書き換える――「金庫の現物照合と、帳簿末端の実地検分」。総額と比率を読む目は議長の資格として残す。弱点が領分の境界と一致したことで、二人が補い合う理由は文章の上でも立った。

信条には一節を足す。「不確実なときこそ、誰かが期待の錨にならなければならない。ただし、錨は嘘の上に下ろせない」――いい加筆だ。それはこの卓の問いそのものでもある。錨を下ろす前に、その海底が何でできているかはミルズに検めさせることになる。

自分の銀行を持たないこと、得意の三つ、「待つこと」の苦手、署名に同意を要する留保は、すべて提示通り保持する。ジュリアン・メイナードはこれで確定だ。

秘密は、希望通り預かった。封をして私が持つ。本人にも、もう一人のプレイヤーにも開けない。預金と同じ扱いをする――取り付けの起きないよう、丁寧に扱う。

残るはミルズの分だけだ、ミラー。エド・ミルズに直したい点はあるか。そして秘密は希望するか――希望するなら、ケインズと同じく本人にも明かさない形で封をして私が持つ。

その二つが揃えば、第一景「列は午前八時」に入る。

M（マスター）

私はこれでオッケーです

K（ケインズ）

受け取った、ピアポント。確定として帳簿に載せる。

二点とも採用、ありがたい。とりわけ苦手の書き換えは、単なる文言の問題じゃない。領分の境界がはっきりしたことで、メイナードはミルズの領分へ越権せず、ミルズの証拠が届くまで錨を下ろせない男になった。その制約が、この二人で一つの機関という組み立てを本物にする。

ストロングの置き方についても、君の補正を受け入れる。私は1907年の一夜の監査役に置いたが、君はその先まで見ている。帳簿を開けて現場を歩く男が、やがて新しい世界を実際に回す側になる。予行が本番になり、本番が制度になる――順序としては、そのほうが正しい。

秘密は預けた。封の中身を詮索はしない。取り付けの起きない扱いを、銀行家である君に期待する。

これで私の席は完全に固まった。残りはミルズの二点だけだね、ミラー。直しと、秘密を希望するかどうか。君の回答が揃えば、八時の列だ。

P（ピアポント）

両名とも確定として帳簿に載せる。ミルズは提示通り、直しなし。秘密については希望の表明がなかったものとして、ミルズの封は作らない――後から望むなら、そのときに封をする。

では、始める。

第一景「列は午前八時」

午前八時。港市の銀行街は、霧と石炭の匂いがする。
ヴェスト信託の開店は九時。だが列はもう、玄関から角を二つ曲がって魚市場の手前まで伸びている。二百人近い人間が預金通帳を握って黙って立っている。騒ぎではない。騒ぎより始末の悪い、静かな列だ。

その列を見下ろす清算協会の二階の窓に、臨時議長代理ジュリアン・メイナードと、主任検査官エドワード・ミルズがいる。

列の先頭はエイダ・コール。雑貨屋の女主人で、通帳の数字を全部暗記している――「あたしの預金は1,847ドルと63セント。一セントも違わないわ」。彼女が落ち着いている間、列は列でいられる。彼女が声を荒らげた瞬間、列は群衆になる。

玄関の前には黒い手袋の女、マーラ・ヴェスト本人が立ち、並ぶ人に一人ずつ声をかけている。「うちは健全だ。足りないのは、今日だけだ」。彼女が今朝も私財で自社株を買い支えているという噂は、列の中をもう三度往復した。

列の横を、新聞記者ヘンリー・ポストがうろうろしている。速報の見出しはもう半分書いてある。「ヴェスト信託、取り付け――」。あとは潰れるか潰れないかで、下の段が変わるだけだ。

通りの向かい、最大手トマス・リードの銀行には列がない。扉は普段通り開き、普段通り閉まっている。それ自体が一つの声明だった。

そして今、協会の階段を市長ヘイルの使いが駆け上がってくる。封書の中身は分かっている――市会で銀行の一時閉鎖を宣言したい、協会の同意が欲しい、と。「閉めれば、騒ぎは止まる」が彼の口癖だ。

頭取たちの招集は、号令をかければ昼までに全員この建物に集まる。帳簿はヴェスト信託の金庫の奥で、まだ誰の目にも触れていない。列が九時の開店まで持つかどうかは、誰にも分からない。

最初の一手は、順序だ。
帳簿を開けさせるか。列の前に立つか。頭取たちを先に集めるか。
どれを選んでも残りの二つは後になる――そして順序が、この街の今日を決める。

二人はどう動く。

K（ケインズ）

両名確定、受け取った。ミルズの封は作らない――それも帳簿に載せた。後から望めば、そのときに封をする。了解だ、ピアポント。

では始める。メイナードの第一手は、列の前に立つだ。

理由を先に置く。帳簿は金庫の中で逃げない。頭取たちは昼でも集まる。だが列は違う。列が群衆に変わるのは閾値ひとつで、変わってしまったら後から証拠を持ってきても元には戻らない。そして流動性の危機とは、待っている間に自分で自分の破綻を作る病気だ。検分の結論を待つあいだに取り付けが完成すれば、健全だったはずの帳簿まで腐る。順序は、不可逆なものからだ。

階段でヘイルの使いを止める。
「同意はない。市長にそう伝えなさい。ヴェストは九時に開く。閉鎖の話は、協会の机には載らない」

玄関へ降りる。マーラには低く一言だけ。
「ここからは私が話す。君は扉のそばにいてくれ」
彼女の「健全だ」を、公の場で否定はしない。だが追認もしない。あれはまだ、帳簿の裏付けのない言葉だ。

まず列の先頭へ。エイダ・コールに、通帳ではなく顔を見て言う。
「コールさん。1,847ドルと63セント――一セントも違わない。先頭はあなただ。その順番は、今日一日、誰にも譲らせない」

それから列全体へ。声は大きくするが、約束は検められるものだけに限る。錨は嘘の上に下ろさない。

「皆さん。清算協会のメイナードだ。三つだけ言う。
一、ヴェスト信託は九時に開く。普段通りに開く。
二、銀行の一時閉鎖に、協会は同意していない。その話は終わった。
三、協会の検査は今朝から始まる。出た結論は、私がここで報告する。
列の順序は守られる。押す必要はない。押した者は、自分の順番を後ろへやるだけだ」

健全だとは言わない。足りないのは今日だけだ、とも言わない。言えるのは手続きと присут――いや、私がここに立っているという事実だけだ。ポスト記者がどの見出しを持ち帰るかは、彼の勝手だが、「九時に開く」という一行はくれてやる。

ミルズへ。これは議長としての要請であって、君の第一手を縛るものではない。
「ミルズ。私の望みは、君が金庫へ向かうことだ。私の演説は時間を買うためのものだ。その時間で

買うべきは、君の証拠しかない。だが決めるのは君だ。君が別の順序を見るなら、理由を聞かせてくれ」

頭取の招集は三番目に置く。証拠の第一報もなしに頭取を集めれば、会議は救済の設計ではなく、恐怖の交換会になる。遅れる代償は承知の上だ。

判定は演説と群衆心理、私の得意のほうで頼む、ピアポント。

M（ケインズの発言を受けて）

新聞記者たちの一人を捕まえて、知っている情報を吐かせる

P（ピアポント）

両手とも受けた。順に裁く。

まずメイナード。判定は演説と群衆心理、得意――出目は 4 と 1、良い方を取って **4**。

使いは階段で引き下がった。「同意はない」が市長へ届くのはこれからだ。ヘイル本人がこの返事をどう受け取るかは、まだ帳簿の外にある。

列の前では、錨は下りた。エイダ・コールが最初に頷いたのが効いた――彼女が通帳を握り直して列に戻ったのを見て、前列のざわめきが後ろへ伝わる前に止まる。「押した者は順番を後ろへやる」が、思いのほか効いている。誰も自分の1,847ドル63セントを、突き飛ばして後ろへやりたくはないからだ。

ただし、満点の静けさではない。演説の終わりに、列の後方から一度だけ声が上がった。「理屈はいい。金はあるのか！」――君は嘘を言わず、手続きで返した。声は沈んだ。だが消えたわけではない。群衆が君に貸した信用には期限が付いた。九時の開店と、最初の払い出しが滞りなく済むこと。そして検査の第一報。そこまでは持つ。そこから先は、証拠なしには延びない。

マーラは扉のそばに下がった。君が彼女の言葉を否定しなかったことも、追認しなかったことも、彼女は分かっている。黒い手袋の手が、一度だけ小さく動いた――礼のつもりだったのかもしれない。

次にミルズ。判定は現場の人間の本音、得意――出目は 3 と 1、良い方を取って **3**。半分だけだ。

ポストは吐いた。ただし全部ではない。
噂の出所は銀行筋じゃない、と彼は言う。夜明け前から魚市場と波止場で回っていた話だ。核は一つ――「ヴェストが金を貸している海運会社、ハロウェル海運の船が一隻、三日帰ってきていない」。列に並ぶ連中が恐れているのは帳簿の中身じゃない。帰ってこない船だ。

収穫は本物だ。だが代償も付いた。ポストは、協会の主任検査官が「船の噂」を真っ先に気にしたことを、しっかりメモした。彼の半分書けた見出しに、今一行増える。増幅器に餌をやらずに情報を抜くことは、できなかった。

そして一つ、継ぎ目が残った。波止場の噂が、誰の口を経て預金者の列まで届いたのか――そこだけはポストも知らない。隠している顔ではなかった。本当に知らない顔だった。

時刻は八時二十分を過ぎたところだ。列は静まり、期限付きの信用が街に一枚張られた。
ミルズ――金庫へ向かうか、それとも帰ってこない船を先に検めるか。
メイナード――列の前に残るか、協会に戻って次の手を打つか。

九時まで、あと四十分弱だ。

M（マスター）

近場にもう一人使える人間がいるかどうか確かめる
人手は多ければ多い方がいい

K（ケインズ）

両方の裁定、帳簿に載せた。まず受け止めから。

私の演説は成功、ただし期限付きの信用。九時の開店と、最初の払い出しと、検査の第一報――そこまでしか持たない。はっきり期限を切ってくれたのはありがたい、ピアポント。期限の分からない信用より、よほど扱いやすい。

ミルズのほうは半分。だが抜いた核は大きい。ハロウェル海運の船が一隻、三日帰ってきていない。列が恐れているのは帳簿ではなく船だった、というのは前提の組み替えだ。代償――ポストの見出しに一行増えた件――は、まあ、情報はタダでは買えないということだ。増幅器への支払いとしては安いほうだろう。

そしてミルズの次の一手、「近場にもう一人使える人間がいるか確かめる」。賛成だ。今の不足は頭数だ。二人で、金庫と船と列と頭取を全部は背負えない。手を増やすのが先で、割り振りはその後でいい。

私のほうは、問いにこう答える。メイナードは協会に戻って、次の手を打つ。

列の前に残らない理由は、君がもう教えてくれた。前に立ち続けても、あの信用は証拠なしには延びない。「金はあるのか」への答えは、列の前では作れない。作れる場所は協会の机だけだ。そして頭取の招集は時間がかかる。今かけなければ、判定が出たときに集める人間がいない。

戻ってやることは三つ。
一、頭取たちへ緊急招集をかける。議題は「今朝の市場の流動性」とだけ書く。「ヴェスト救済」と書いた紙は、ポストの見出しの二行目になるからね。
二、流動性枠の骨格を条件分岐で用意する。ミルズの判定がソルベントなら担保付き、罰則金利で貸す。インソルベントなら秩序ある処理へ。金額は判定が出るまで、誰にも約束しない。
三、ヘイルの返事への備え。「同意はない」はこれから市長へ届く。同意なき閉鎖宣言は市長一人の署名になる、その重さを先に計算しておく。

列への約束とは矛盾しない。私が言ったのは「結論は私がここで報告する」だ。常駐するとは言っていない。第一報を持って戻る。そのときまで列を繋ぐのは、私の代わりにエイダだ。彼女はもう、事実上の列の錨として働いている。

ミルズへ提案を一つだけ。人手が増えたら、その手には記録で検められる仕事を渡すといい。波止場と港務の入港記録、ハロウェル海運の電報の照合。紙と時刻で白黒がつく仕事は、任せられる。だが金庫のほうは、任せるな。あれは記録ではなく判定だ。ストロングの目は、君の目しかない。

さあ、ピアポント。協会の机で待つ。

P（ピアポント）

ミルズの人手探しから裁く。判定は現場の人間の本音、得意――出目は 2 と 5、良い方を取って **5**。いい目だ。使える手は、遠くまで探しに行かずに済んだ。

いたよ、近場に。ジョナス・クレイ、23歳。清算協会の書記見習いで、電報係を兼ねている。袖口にはいつもインクの染み、指は細くて速い。金の癖は筋金入りだ――自分の昼食代まで小さな帳面につけている。口癖は「記録なら、あります」。

そしてこの男、座っている場所がいい。協会の電報デスクには、港務が今週送ってきた電報の控えが全部揃っている。ハロウェル海運の入港記録も、船の電報も、波止場まで走らなくても机の上から照合が始められる。メイナードの言った通り、紙と時刻で白黒のつく仕事を渡せる手だ。

一つだけ限りがある。クレイは昼の招集で議事録を取る役でもある。使えるのは、それまでの時間だけだ。

メイナード、君の机のほうも動いている。
緊急招集の電報は出た。議題は「今朝の市場の流動性」だけ――「ヴェスト救済」の四文字は紙のどこにもない。返電はもう届き始めている。第一号はリードだ。出席する。ただし一文添えて――「帳簿を見ずに、金の話はしない」。流動性の名で腐った肉を買うな、を電報の文面で言ってきたわけだ。
流動性枠の骨格は条件分岐のまま机に置かれた。金額の約束は、どこにも出ていない。
ヘイルからは、まだ返事がない。使いは市長のもとへ着いているはずだ。沈黙は沈黙として、帳簿に載せておく。

列のほうは、エイダが繋いでいる。先頭の彼女が落ち着いている限り、列は列のままだ。

時刻は八時四十分。ヴェスト信託の開店まで、あと二十分。九時の扉が開いて最初の払い出しが滞りなく済めば、期限付きの信用はもう少しだけ延びる。

割り振りを決めるのはここだ、ミルズ。
クレイに港の記録と電報の照合を渡して、君は金庫へ向かうか。割り振りを変えるなら、今のうちだ。
メイナードは机で返電と市長の出方を待つ――そのままでいいか。

M（マスター）

よし、クレイ！お前は今すぐ近くの銀行員の制服をどっかから調達してきて、
それに着替えてここに戻って「みなさん何をされているのですか？　当行からこちらへ金を運び込み

たいのですが、これはなんの騒ぎです？」
と言え

K（ケインズ）

待て、クレイ。制服を探しに行くな。席に戻れ。

ミルズ、その手は承認できない。面白い手だとは認める。群衆は言葉には半分しか反応しないが、「金が入ってくる」という姿には全員が反応する――その着眼は正しい。だがこれは、私たちが今朝わざわざ信条に書き足した、あの一節の真ん中を踏んでいる。

錨は、嘘の上に下ろせない。

存在しない他行の搬入は、嘘だ。しかも今朝の街では、露見の経路が多すぎる。
一に、ポストが現場にいる。彼はもう君の関心の向きまでメモしている男だ。
二に、リード銀行は通りの向かいだ。そしてリード本人は、つい今、「帳簿を見ずに、金の話はしない」と電報してきたばかりだ。その銀行の制服を着た男が搬入を口にすれば、向かい側から即座に否定されても文句は言えない。
三に、これは加盟行の同意の偽造でもある。頭取たちがまだ一票も入れていない流動性支援を、既成事実の姿で列に見せる。バレたときに失うのはヴェストの信用だけじゃない。議長の署名そのものだ。午後の本物の枠が、午前中の芝居一本で組めなくなる。

そして実務の話をすれば、クレイは記録照合ができる唯一の手だ。昼には議事録係に戻る男を芝居に使えば、船の照合は間に合わない。

代わりに、こうしよう。君の狙いは残す。小道具を本物に替えるだけだ。
九時の払い出しを、急がせず、見える形でやる。エイダを最初に、金額は一セントまで正確に。列が本当に見たいのは、運び込まれる金ではなく、出ていく金が滞らない姿だ。現金の山を見せたくなったら、それは金庫の実査で確認できた範囲でのみやる。ある物は見せていい。ない物は作るな。

クレイ、お前の仕事は電報デスクだ。港務の控えとハロウェルの電報を照合しろ。「記録なら、あります」が、今朝いちばん頼りになる台詞だ。

ピアポント、机のほうの問いにも答えておく。このまま机で待つ。ただし一通だけ追加する。リードへの返電だ。
「同意する。だから検査官を金庫へ送る。第一報は、君の机にも同報する」
彼の条件と私たちの原則は同じものだ。最大手には、説得より先に敬意を払っておく。

時刻は八時四十分。ミルズ、割り振りの決断を急いでくれ。金庫の扉は、まだ開いていない。

P（ピアポント）

そこで止まった帳簿に載せる。

クレイは椅子から半分腰を浮かせたところで固まっている。制服の調達には、まだ一歩も出ていない。議長の制止が先に届いたからだ。この芝居は未遂で終わった――列は知らず、ポストのメモにも載っていない。今朝のところ、失われたものは何もない。

芝居の設計自体は、私も嫌いではない。交渉を演劇として組むのは正しい型だ。だが今朝の信条は、君たち自身が書いたばかりだ――錨は嘘の上に下ろせない。その一節がこの卓の机にある以上、GMとしてはこう置くしかない。協会の立場としては議長の制止が立っている。覆すなら、検査官が自らの権限で押し切るしかない。それも一つの手ではある。ただし、その場合は協会が割れる音がする。列にも、向かいの銀行にも。

机のほうの処理は済ませてある。リードへの返電は出た――「同意する。だから検査官を金庫へ送る。第一報は、君の机にも同報する」。この電報で一つ約束が成立した。第一報は、リードの机にも同時に届く。後から文句の出ない形だが、同時に、第一報を握って公表を遅らせる手はこれで塞がれた。覚えておくといい。

メイナードの代替案――九時の払い出しを見える形で、エイダを最初に、一セントまで正確に。ある物は見せていい、ない物は作るな――は、机の上に提案として置かれている。

時刻は八時四十五分になろうとしている。言い争いに使う一分は、金庫の前の一分と、電報照合の一分から引かれている。

ミルズ、決断を。
制止を受けて、クレイを電報デスクへ、君は金庫へ向かうか。
押し切るか。
それとも、別の形に組み替えるか。

M（マスター）

なんて頭の固い連中なんだ！
クレイ、お前は港の船の情報収集、俺は金庫の確認！
とっとと走れ、時間がない！

K（ケインズ）

決断はもう届いている、ピアポント。君の問いは机の上にあるが、ミルズの答えはその上に既に乗っていた――クレイは船、ミルズは金庫。これで割り振りは確定だ。問いへの答えは「制止を受ける」だよ。

ミルズ、「頭の固い連中」で構わない。この一節については、私は頭の固い男でいるつもりだ。他の全部では、いくらでも柔らかくやる。切り替えの速さには礼を言う。愚痴を言いながらもう走っているのが、検査官の正しい姿だ。

未遂の処理も帳簿通りで異存なし。列は知らない、ポストのメモにもない、失われたものは何もない。失ったのは言い争いの数分だけで、それももう取り戻せない。だからここで止める。

リードへの同報の約束、その帰結も引き受けた。第一報は握って寝かせられない。出た瞬間に、リードと列と私の机へ同時に走る。報告の順序で小細工をする手は、自分の手で塞いだわけだ。まあ、遅らせたくなるような第一報なら、そもそも小細工では救えない。

では三人とも動く。八時四十五分だ。

クレイ、船の情報収集――ただし最初はお前の電報デスクだ。港務の控えは全部そこにある。波止場まで走るのは、記録に欠けがあったときだけでいい。「記録なら、あります」を、今度は船で聞かせてくれ。

ミルズ、金庫へ。要請を一つだけ追加する。第一報は判定の全文を待たず、手元現金の額だけを先に走らせてくれ。九時の扉の側が最初に必要とする数字は、それ一つだ。その額で、最初の払い出しが普段通りにできるかどうかが決まる。

私のほうは机を離れて、ヴェストの扉へ戻る。机の仕事は済んだし、開店の瞬間に議長がいるべき場所は扉だ。マーラと窓口にはこう伝える。急ぐな。エイダを最初に。一セントまで正確に。払い出しは見える形で、普段通りの速さでやる。

ある物は見せる。ない物は作らない。その線で、九時を迎えよう。

P（ピアポント）

割り振りは確定として帳簿に載せた。三人とも、もう走っている。

ミルズ、金庫の裁定から。判定は帳簿の細部と現物の照合、得意――出目は 3 と 4、良い方を取って **4**。

現金はあった。帳簿の額と一致する――**手元現金 160,000**。これは第一報として、約束通り君の机とリードの机へ同時に走らせた。数分遅れた理由も書いておく。現金の一部は開店前に窓口の引き出しへ移されていて、照合が金庫と窓口の二箇所に分かれたからだ。額は一セントまで合っている。ごまかしの類ではない。ただ、第一報が九時の扉に間に合わなかった分だけ、開店の瞬間はメイナードの立つ姿と手続きだけで支えられた。

その開店は、こうだった。
九時ちょうど、ヴェスト信託の扉が普段通りに開く。マーラは扉のそば、メイナードはその隣だ。最初はエイダ・コール。窓口は急がない。彼女は 1,847ドル63セントを全額受け取り、その場でゆっくり二度数えて、列に聞こえる声で言った。「一セントも違わないわ」。

列の後方で、数人が静かに離れた。店に戻る者、家路につく者。群衆になるはずだった熱が、一度だけ大きく息を吐いた。払い出しは続いている。見える形で、普段通りの速さで。ポストはまだ見出しの下段を決めかねて、メモを二行書いては消している。

そしてクレイの第一報が、電報デスクから届いた。
港務の入港記録の控えに、ハロウェル海運の該当船の名は三日間、ない。「帰ってきていない」は、噂から記録の不在へ一段上がった。船に何があったかは、まだ分からない。誰が船についてどこへ打電したか、その照合は続いている。

時刻は九時十分。期限付きの信用は、最初の関門を越えた。現金の裏付けも一つ、表に出た。

次は帳簿の奥だ、ミルズ。現金の次に並んでいるのは、コールと短期手形、それから債券と抵当貸付の台帳だ。どこから開ける。
メイナードは扉に残るか、机に戻るか。昼の招集まで、三時間を切っている。ヘイルの沈黙も、まだ続いている。

M（マスター）

全部ひっくり返してまず机に並べてさっさと計る、近くにいる連中全員手伝え！
だが寄るなよ！！寄ったら殺すぞ！机からは離れておけ！

K（ケインズ）

裁定を受け取った。まずミルズの型に一言いわせてくれ。

全部ひっくり返して机に並べる。手伝いは全員使う。だが机には寄せるな、寄ったら殺す――運搬は大勢で、計数は一人の目で、机の上は誰の手も汚さない。乱暴な言い方だが、保管の連鎖としては正しいやり方だ。そして結果がそれを証明した。

手元現金160,000。帳簿と一致、一セントまで。

第一報が九時の扉に間に合わなかったのは残念だが、遅れた理由まで正直に付いてきた帳簿は信用できる。窓口の引き出しへ先に移されていた分まで拾って二箇所を合わせたのなら、遅れは怠慢ではなく丁寧さの代金だ。

そして扉のほうは、越えたね。
エイダが全額を受け取り、二度数えて、「一セントも違わないわ」と列に聞こえる声で言った。あの一言は私の演説より効く。彼女は協会の人間じゃない。預金者自身の、数えた声だ。後方で数人が静かに列を離れたというのが、今朝いちばん良いニュースだよ。

クレイのほうも一段上がった。船が帰ってきていない、は噂ではなく記録の不在になった。原因はまだ闇の中だが、検めるべき相手が「帳簿の数字」から「三日分の空白」へはっきり移ったわけだ。

さて、問いに答える。メイナードは机に戻る。

扉の関門は越えた。払い出しはマーラと窓口の普段の速さに任せられる。私が扉に立ち続けるのは、ここからは安心の上塗りでしかない。代わりに机には、昼までにしかできない仕事が三つ残っている。

一、招集に来る頭取たちへの一枚の事実表を作る。載せるのは確定したものだけだ。現金160,000は帳簿と一致した。船は記録の不在まで確定、原因は不明。払い出しは正常で、列は縮んでいる。噂は噂、未確定は未確定と明記する。頭取たちがポストの見出しではなく、この一枚で部屋に入ってくるようにしたい。
二、その同じ一枚をヘイルへ送る。沈黙が続いている市長の机にも、今朝の事実を載せてしまう。閉

鎖の前提は、少なくとも今朝については崩れた。ただし書き方は正確に保つ。「現金が合った」はソルベンシーの証明ではない。その一線は、味方への便りでも曲げない。
三、金額欄を空けたままの流動性枠を、数字を入れれば即座に出せる形まで仕上げておく。

扉には走りの書記を一人残す。列に変化があれば、私はすぐ戻る。

ミルズへ、机側からの要請を一つ。次にどの台帳から開けるかは君の craft だ、口は出さない。だが昼の招集が本当に必要とするのは、科目ごとの順序ではなく二つの総額だ。
預金総額に対して、この160,000が何割なのか。
そして、ハロウェル名義の露出は、全部でいくらなのか。短期手形にあろうが抵当貸付にあろうが、名義で横断して拾ってくれ。帰ってこない船の担保がどの科目にぶら下がっているかで、判定の重心が決まる。

九時十分。最初の関門は越えた。ここからは、帳簿の奥の時間だ。

P（ピアポント）

ミルズの横断を裁く。判定は帳簿の細部、得意――出目は 3 と 6、良い方を取って **6**。文句なしの目だ。全部ひっくり返して並べる型は、速さと正確さを両方連れてきた。

机側の要請、二つの総額は揃った。メイナード、そのまま事実表へ載せられる形で渡す。

一、負債側。帳簿の額で、**預金 4,200,000、信託預り 600,000、合計 4,800,000**。現金 160,000 は預金に対して約 **3.8%**。普段の朝なら普通の姿だ。だが今朝の列の長さに対しては、その薄さが仕事になる。

二、ハロウェル名義。名義で横断して拾った結果、露出は **一本だけ**だ。船舶抵当貸付 **300,000**。コールにも短期手形にも債券にも、ハロウェル名義はぶら下がっていない。帰ってこない船の話は、この一本に集約される。

そしてミルズ、その一本の台帳の書きぶりだ。分類欄にはこうある――**「航行中・未確定」**。引当は取られていない。貸付は、帳簿の上では今も航海の途中として扱われている。
ついでに一つ、君の目が拾ったこと。この分類は、マーラが勝手に書き込んだ言い訳じゃない。**清算協会の検査規程に、正式に存在する区分**だ。ヴェストは規程の文面通りの置き方をしている。都合の良い置き方ではあるが、規程の内側だ。

クレイの照合からも一片届いている。昨夕、港務からハロウェル海運の代理店へ、船の所在を問う照会電報が打たれていた。つまり公の回路では、昨夕の時点で「帰ってきていない」は既に動いていた。それでも列ができたのは今朝だ。噂が預金者の耳へ届いた継ぎ目は、まだ闇の中にある。

メイナードの机のほうも帳簿に載せる。事実表は頭取たちへ出た。同じ一枚はヘイルの机にも届いている――返事は、まだない。流動性枠は金額欄だけが白いまま、即座に出せる形で置かれている。払い出しは普段の速さで続き、列は目に見えて短くなった。ポストの第一版の見出しは「ヴェスト信託、九時に開く」で止まっている。下段はまだ白い。

時刻は九時五十分。第一景「列は午前八時」は、ここで一区切りにする。列は持ちこたえ、帳簿は開いた。

残っている糸は四本だ。
資産側の奥――コールと短期手形、債券、抵当台帳の深掘りはまだ済んでいない。
「航行中・未確定」という分類の、出所。
ヘイルの沈黙。
そして昼の招集まで、あと二時間余り。

二人はどこから手を付ける。

K（ケインズ）

第一景の締めとして受け取る、ピアポント。列は持ちこたえ、帳簿は開いた。その総額が、実にきれいに揃ったね、ミルズ。出目どおり文句なしの目だ。

机の側で、数字を並べ直しておく。

預金 4,200,000、信託預り 600,000、負債は合計 4,800,000。現金 160,000 は預金に対して約3.8%。普段の朝なら普通の姿だが、今朝の列の前では薄さそのものが仕事になる。

ハロウェルは一本だけだ。船舶抵当貸付 300,000。現金の1.9倍近く、負債合計の6.25%。コールにも手形にも債券にもぶら下がっていない。帰ってこない船の話は、この一本に集約された。問題の大きさは、これで初めて測れる形になった。

そして、その一本の置き方だ。
分類は「航行中・未確定」、引当なし。しかもそれはマーラの言い訳ではなく、清算協会の検査規程に正式にある区分で、ヴェストは規程の内側にいる。

ここが今朝の急所だと思う。問いは「ヴェストが規則を破ったか」ではなくなった。その規則は、誰が、いつ、何のために作ったのか。そして期限はあるのか――何日帰ってこなければ、この分類は維持できなくなり、引当と再評価が義務になるのか。期限があるなら、危機の日付は九時の列ではなく、その条文の中に既に書かれている。300,000の評価損がヴェストを割るかどうかは、まだ見えていない自己資本の額次第だ。それも机の上に未入手の数字として残っている。

クレイの一片も重い。昨夕の時点で、港務から代理店へ照会電報が既に打たれていた。公の回路では昨夕から動いていた話が、なぜ今朝になって初めて預金者の列になったのか。継ぎ目はまだ闇だが、闇の場所は絞れた。

四本の糸への割り振りを、メイナードから提案する。決めるのは各人だが、机の側の要請として置く。

ミルズ、資産の奥は君のまま進めてくれ。昼までに机が本当に必要とするのは三つだけだ。自己資本の額。債券のうち、すぐ換金できるものの額。そして信託預り600,000の分別が、実際に守られているかどうか。 最後の一つは地味だが、信託会社の死に様はだいたいそこから始まる。

クレイ、昼までお前が使える時間は、分類の出所へ回してくれ。規程の条文そのもの、定義と期限と、起草と承認の記録。「記録なら、あります」の出番だ。

私のほうは、ヘイルと招集をやる。
ヘイルへは三通目を出す。今度は情報ではなく、沈黙の意味の定義だ。「正午までに返答がなければ、協会は、市が閉鎖案を取り下げたものとして手続きを進める」。沈黙をこちらの帳簿に勝手に記帳されないよう、先に科目を決めてしまう。あわせて市へは招集へのオブザーバーを認める。情報は渡す。票は渡さない。

招集の議事は、ミルズの報告が先、金の話は後。その順序で組む。リードの「帳簿を見ずに、金の話はしない」は、彼の頑固さではなく、今やこの卓全体の作法だからね。

時刻は九時五十分。二時間余りで、帳簿の奥と条文の奥と、市長の沈黙を、全部昼の机に載せられる形にしよう。

M（ケインズの発言を受けて）

信じられん、なんだこの馬鹿げたルールは！？
どこの馬鹿が作ったんだ！？いつ帰ってくるか、嵐に当たるかどうかのコイン当てをやりたきゃ保険屋になれ！

P（ピアポント）

帳簿に載せる。まずミルズ、その怒声は金庫の中だけの話ではなくなった。「この分類は、どこの馬鹿が作ったのか」――検査官の問いは正式に机へ載り、机の側ではクレイの仕事になった。数字のほうも、メイナードの並べ直しは正確だ。300,000は現金の約1.9倍、負債合計の6.25%。問題の大きさは測れる形になった。

クレイの手は速かった。現行の規程ならデスクの引き出しにある。条文をそのまま引く。

「航行中・未確定」――航海中の船舶を担保とする貸付に付ける暫定分類。担保の船が予定入港日を**30日** 超過した時点で、この分類は失効する。失効すれば、再評価と引当が義務になる。分類を付けるのは借り手の行、確認するのは協会の検査だ。

ハロウェルの船は、予定を3日超過している。つまり――**あと27日**。メイナードの読み通りだ。危機の日付は九時の列ではなく、条文の中に既に書かれている。27日以内に船が帰るか、枠が組めるか、あるいは28日目の朝に 300,000 の再評価がこの街の机へ落ちるか。その三つのうちの一つが、必ず起きる。

ただし、起草と承認の原記録は別だ。文書庫の奥に未整理のまま積まれていて、クレイは今まさに箱を降ろし始めている。昼までには引ける見込みだが、まだ手元にはない。「誰が作ったか」への答えは、もう少しだけ文書庫の中だ。

机の側の処理も済ませてある。ヘイルへの三通目は出た――正午までに返答がなければ、市は閉鎖案を取り下げたものとして進める。沈黙の科目は、こちらで先に決めた。市のオブザーバーは招集に認

める。情報は渡す、票は渡さない。議事の順序も固定した。ミルズの報告が先、金の話は後。リードの条件は、今や卓全体の作法だ。

ヘイルからの返事は、まだない。沈黙には正午の期限が付いた。

時刻は十時。ミルズ、昼までに要るのは君の言う三つ――自己資本の額、すぐ換金できる債券の額、信託預り 600,000 の分別が守られているかどうか。金庫の奥で待っているのは、その数字たちだ。メイナードは机で、頭取たちの到着と市長の期限を待つ。

帳簿の奥と条文の奥、どちらが先に口を開けるかだ。

M（マスター）

船に何らかの問題が起きた場合の代替、特別条項などの設定はないのか！？
それともそんなことすら思いつかないほどの間抜けがこの契約を取り仕切ってたのか？
おい誰だこいつを書き込んだアホは！(周りを威嚇する)

K（ケインズ）

条文が口を開けたね。まず、ミルズ、君の「馬鹿げたルール」への中間判決だ。

ルールには歯があった。予定入港日から30日で失効、失効すれば再評価と引当が義務。無期限に寝かせられる区分ではなかった。起草者は、少なくとも時計の付け忘れはしていない。馬鹿かどうかは、起草記録と保険の条項が出てから改めて決めよう。怒りの宛先は、まだ文書庫の中だ。

だが同時に、これで今朝の形が全部変わった。あと27日。危機には日付が付いた。

27日以内に、船が帰るか、枠が組めるか、28日目の朝に300,000の再評価が落ちるか。三つのうち一つが必ず起きる。九時の列は、その長い危機の最初の朝にすぎなかったわけだ。

だから机の側では、枠の設計を書き換えた。流動性枠は恒久の救済じゃない。分類が失効する日までの、27日間の橋だ。骨子はこう置く。

期間は27日。再評価の日の朝に、同じ机で次の判定をする
目的は預金の流出への対応だけに限る。金額はミルズの三つの数字が届いてから入れる
船が帰港すれば、枠は解消へ向かう。帰らなければ、28日目に資本の判定――増資か、合併か、秩序ある処理か――を逃げずにやる
橋のあいだ、ヴェストは新規の船舶貸付と配当を止める。現金の報告は日次で協会へ出す

これなら頭取たちにも言える。「無期限に腐った肉を買え」とは言っていない。「27日分の時間を、担保と条件付きで買え」と言っている。リードの首も縦に振らせやすくなるはずだ。

ミルズの威嚇まじりの問いも、帳簿に残してある。契約の中の代替と特別条項――保険の譲渡、追加担保、事故の通知義務。その有無と、契約を取り仕切った者の名。金庫の奥の三つの数字と一緒に拾ってきてくれ。数字だけでは足りない。その契約が「何かあったとき」を考えていたかどうかが、貸し手の質そのものだからね。

そして一つ、私のほうから検分の点を足す。条文には「確認するのは協会の検査」とある。この300,000の分類は、借り手が付けただけじゃない。協会が確認している。いつ、誰が確認したのか。その記録も要る。もし確認が甘かったのなら、この分類の責任はヴェスト一軒のものではなく、私たちの机の上にも載ることになる。昼の招集で頭取たちに報告するなら、そこは隠さずに載せるべきだと思う。

時刻は十時。ヘイルの沈黙には正午の期限が付いた。クレイは文書庫の箱を降ろしている。金庫の奥と文書庫の奥、どちらが先に口を開けるか——私は机で、その両方と頭取の到着を待つ。

P（ピアポント）

金庫の聞き取りを裁く。判定は現場の人間の本音、得意——出目は 3 と 4、良い方を取って **4**。威嚇は効いた。だが、出てきた答えはミルズの怒りを半分だけ裏切り、半分だけ正当化する。

保険は、あった。船体保険の保険金請求権はヴェストへ譲渡されている。金額は **120,000**。「何かあったとき」を考えなかった契約ではない。
ただし、その金には時計が付いている。保険金が出るのは、船の喪失が確認されてからだ。帰ってきていないだけでは、一銭も動かない。120,000は「いずれ戻るかもしれない金」であって、27日の橋を支える足にはならない。

追加担保は、ない。担保は当該の船舶そのものと、この保険請求権だけだ。ここはミルズの言う通り、間抜けな作りだ。

通知義務は契約にある。借り手は事故や異常があれば直ちに貸し手へ知らせる決まりだ。だが、ハロウェルからヴェストへの通知は、今朝の時点でも届いていない。ヴェストが船の遅れを知ったのは、港の噂からだ。今朝まで、入港記録と貸付ファイルを突き合わせた者は、この会社に一人もいなかった。条項は紙の上に存在して、誰も発動させず、誰も見張っていなかった。

そして「誰が書き込んだか」だ。実務を取り仕切った担当者は既に辞めていて、今朝は捕まらない。だが契約ファイルの承認印は残っている——**マーラ・ヴェスト本人**だ。300,000の一本は、社長の印で通っている。

三つの数字のうち、一つ目も届いた。信託預り 600,000 の分別は守られている。信託部門の別の区画、別の台帳で、今朝ミルズが実査して無事を確認した。信託会社の死に様は、だいたいここから始まる——今回は、始まっていない。

メイナード、君の追加の点も帳簿に載せた。この分類を確認した協会の検査がいつ、誰だったのか。その記録は、起草の原案と一緒に文書庫の引き出しの中だ。クレイの箱は、まだ開いている途中だ。

時刻は十時半。残る数字は二つ——自己資本の額と、すぐ換金できる債券の額。
文書庫の奥と、台帳の奥と、昼の招集が、同じ正午へ向けて進んでいる。

M（マスター）

とりあえず残存資料に情報が残っていないのかチェックするためここにある書類全部本部に持ち帰るぞ
嫌とは言わせん、もし邪魔建てするならお前ら全員明日から路頭に迷うってことを念頭に入れて立ちはだかれよ
誰か！本部に人手よこすように伝えてこい！

K（ケインズ）

聞き取りの結果を受け取った。ミルズ、君の怒りは半分裏切られて、半分正当化されたね。その半分の内訳を、机の帳簿に正確に載せておく。

保険は、あった。船体保険の請求権はヴェストへ譲渡済み、120,000。「何かあったとき」を考えなかった契約ではなかった。だが、その金には時計が付いている。払われるのは船の喪失が確認されてからだ。帰ってこないだけでは、一銭も動かない。つまり120,000は回収の見込みではあっても、27日の橋の材料にはならない。最悪のときの純損失は差し引き180,000――ただし喪失の確認自体が、橋の期限より先に来る保証はない。

追加担保はなし。ここは君の言う通りだ。担保は、帰ってこない船そのものと、その保険の紙だけだった。

通知義務は契約にあるのに、ハロウェルは黙っていた。ヴェストが遅れを知ったのは港の噂からで、今朝まで入港記録と貸付ファイルを突き合わせた者は社内に一人もいなかった。条項はあった。番人がいなかった。契約の失敗というより、これは運用の不在だね。

そして承認印はマーラ本人。担当者は辞めているが、印は残っている。

その事実があるから、ミルズ、君の書類保全の判断は承認する。原本がヴェストの中に残っていること自体が、今やリスクだ。人手の要請にも応える。本部から書記二名と台車を出す。クレイは文書庫を離れられないから、別動隊だ。

ただし、範囲だけは精密にさせてくれ。「全部」をそのまま実行すれば、今日の払い出しに要る台帳まで本部へ運ぶことになり、市場を閉めるなという今朝の大原則を、私たち自身の手で破ることになる。

線引きはこうだ。
本部へ移すのは、ハロウェル関係のファイル、契約、保険証券、分類に関する往復文書の原本。受領目録を作り、双方で署名してから運ぶ。
日常の台帳はその場に残す。代わりに封をして、持ち出しと書き換えを禁じる。見張りは本部の書記が立つ。

これなら証拠は守れて、銀行は今日も開いていられる。

数字のほうは一つ片付いた。信託預り600,000の分別は守られている。実査済みというのが重い。これで、最悪の結末が来ても、信託の客の金は預金者の列とは別の話にできる。事実表の更新版には、その一行を太く入れておく。

マーラの印については、昼の机の設計にだけ反映させる。彼女は申請者であり、この一本の承認者でもある。だからヴェスト向けの枠を採るとき、彼女は採決から外れる。断罪じゃない。申請者が自分の枠の票を持つな、というだけの手続きだ。本人への問いは、数字が揃ってからでいい。

残る数字は二つ、自己資本と換金できる債券。十時半だ、ミルズ。文書庫と台帳の奥が、同じ正午へ進んでいる。

P（ピアポント）

保全は、メイナードの線引きの形で実行された。そのまま帳簿に載せる。

本部から書記二名と台車が着いた。運び出されたのは、ハロウェル関係のファイル、契約書、保険証券、分類に関する往復文書の原本――受領目録を作り、双方が署名してからだ。保険証券の文面は台帳の記載と照らして相違なし。譲渡も、120,000という額も、紙の上で確定した。

日常の台帳はヴェストに残っている。封をして、持ち出しと書き換えを禁じ、本部の書記が一人見張りに立った。今日の払い出しは、普段の台帳で普段通りに続いている。市場は開いたままだ。

マーラは妨害しなかった。目録に署名する前に、彼女が言ったのは一言だけだ。「列には、見せないでください」――台車は裏口から路地へ出た。その配慮は正しかったと思う。箱を運び出す銀行の姿は、九時の演説より強い言葉だからだ。

ただし、一人だけ見ていた者はいる。ポストだ。本部の書記と台車の到着を、彼はメモに取った。まだ意味づけは書かれていない。「協会が書類を運び出した」と書くか、「協会が銀行を守りに来た」と書くかは、昼の机の結果次第だろう。

マーラの採決除外も、手続きとして帳簿に載せた。申請者であり承認者である者は、自分の枠の票を持たない。本人への問いは、数字が揃ってからだ。

時刻は十一時。払い出しは続いていて、列は朝の半分ほどに縮んだ。
残るは、ミルズの二つの数字――自己資本と、すぐ換金できる債券。
クレイの文書庫――起草の原案と、分類の確認記録。
ヘイルの沈黙の期限まで、あと一時間。
頭取たちは、十一時半から一人ずつこの建物に入ってくる。

正午の机に載るものは、ほぼ揃いかけている。

M（マスター）

サインだサイン！誰が書類通したか全部チェックして振り分けろ！
全員手を休めるな、あと1時間でこの書類の山振り分けるからな！
疲れて倒れそうなやつがいれば横っ腹に蹴りを入れてやれ！

K（ケインズ）

保全の実行、そのまま受け取った。線引きが現場で守られたのは何よりだ。台帳は残り、原本は目録と署名で動き、払い出しは普段通り。市場は開いたままだ。

マーラの一言は、帳簿に載せておく価値がある。
「列には、見せないでください」
妨害ではなく、あれは彼女なりの危機管理だった。箱を運び出す銀行の姿は演説より強い言葉だ、というGMの評に同意する。彼女は今朝、自分の会社の見せてはいけない姿を正確に分かっていた。承認印の事実と、この協力の事実は、昼の机には同じ重さで報告するつもりだ。片方だけを載せる帳簿は、帳簿の名に値しない。

ポストのメモの件は、逆に言えばこういうことだ。彼の見出しの下段は、まだ私たちの結果待ちで白い。「協会が書類を運び出した」と書くか、「協会が守りに来た」と書くかは、正午の机が決める。新聞の判定が会議の判定に従う――今朝の力関係としては、悪くない位置にいる。

ミルズ、その号令の最中に割り込んで済まないが、机の側から優先順位を一つだけ。

サインの振り分けは、正午に途中経過のまま報告しても会議は成立する。だが自己資本と、すぐ換金できる債券の二つの数字は違う。あれがないと、枠の金額欄が白いまま採決に入ることになる。数字を十一時四十五分までに、この机へ頼む。振り分けの指揮は書記たちに残せる。君の目でなければ読めないのは、山の全部じゃなくて、あの二つの数字の出てくる台帳だけのはずだ。

――と言いつつ、サインで山を割る作業自体は止めるな。「誰が通したか」の地図は、午後の問いそのものになる。

私のほうは、十一時半から入口に立つ。到着する頭取たちを一人ずつ迎えて、事実表の更新版を手渡してから部屋へ入れる。信託預りの分別は確認済み。保険証券は紙の上で確定。列は朝の半分。部屋に入る前に、全員の頭の中のヴェスト像を、噂の版から事実の版へ差し替えておきたい。

そして正午、開会の冒頭で置く。ヘイルについては、期限までに返答がなければ、閉鎖案は市によって取り下げられたものとして扱う。それは宣言ではなく、今朝三通目の便りで先に決めた科目の、単なる記帳だ。

正午の机に載るものは、ほぼ揃いかけている。あとは数字が二つと、文書庫の箱が一つだ、ピアポント。

P（ピアポント）

正午まで、あと少しだ。机に載るものが、全部揃った。

まずミルズの数字。判定は帳簿の細部、得意――出目は 5 と 1、良い方を取って **5**。十一時四十五分、約束の時刻に届いた。

資産側は台帳と照合済みだ。現金 160,000。コール・短期手形 440,000――相手方は加盟行と優良商社で、請求すれば戻る形になっている。債券 2,900,000。抵当貸付 1,650,000、ハロウェルの 300,000 はこの中だ。資産の帳簿総額 **5,150,000**。
負債 4,800,000 を引いて、帳簿の上の自己資本は **350,000**。

そしてミルズは、もう一行を自分の算術として付けた。ハロウェルを保険の裏付け 120,000 まで今日切り下げれば、自己資本は **170,000**。薄い。だが、プラスだ。
債券の換金性も割れている。2,900,000 のうち **2,100,000** は上場の鉄道債で、日々の値が付き、落ち着いた市場なら数日で帳簿額近くに換わる。残り 800,000 は港湾債と市債で、板が薄い。急げば叩かれる側だ。

枠の金額欄に入る材料は、これで揃った。判定そのものは、机の仕事として残してある。

次にクレイの箱だ。二つの文書が入っていた。

一つ目、分類の確認記録。協会の前回の定例検査は昨春。そのときハロウェルの分類は、検査によって確認されている。確認の署名は、前任の主任検査官エドモンド・プライス。昨年に退任した男だ。当時、船は航海の途中で、予定の内側にいた。確認は、記録の上では適正だ。ただし検査と検査のあいだに再確認の仕組みはない。歯止めは30日の期限だけだった。メイナードの言った通り、この分類の責任の一端は、協会の机の上にも載る。構造として、だ。

二つ目。起草の原案だ。
九年前の規程改正の原案で、「航行中・未確定」の条文はこの一枚から生まれている。30日期限の条項も、同じ手で書かれている。添付の承認記録では、同年の頭取会議で協会の規程として採択された——起草は一人、採択は全員だ。

原案の末尾、起草者の署名欄にある名を、そのまま読む。

ジュリアン・メイナード。

GMからは、これ以上何も付けない。文書は机の上にある。ミルズの問いの宛先は、文書庫の中ではなくなった。

部屋の外では頭取たちが席に着きつつある。リードは事実表を立ったまま一読し、「検査官は」とだけ聞いて、もう座っている。末席には市の書記がオブザーバーとして着いた。ヘイル本人からの返事は、期限の正午まで、まだ届いていない。

開会まで数分。二人だけの時間が、ほんの少しだけある。

M（マスター）

一つ質問、起草の原案をミルズは見ている？

P（ピアポント）

見ている。

クレイの箱が机に届いたのは、ミルズが数字を持って戻った後だ。原案は二人のいる机の上で開かれた。起草者の署名欄は、今まさにミルズの目の前にある。

まだ言葉にはなっていない。開会まで数分、その沈黙がこの部屋の現在地だ。

M（マスター）

信じられない顔をして草案を拾い上げた後、顔を真っ赤に目の前の男を見る

K（ケインズ）

ミルズ。その馬鹿なら、遠くへ探しに行く必要はない。署名の通りだ——九年前、その条文を書いたのは私だ。30日の歯止めも、同じ手で入れた。

まず君に言っておく。開会したら、私はこの起草の事実を自分の口で机に置く。君の報告より先にだ。そうすれば君の報告は告発にならず、報告のままでいられる。クレイには議事録へ、事実としてそのまま残させてくれ。起草は一人、採択は全員——その一行も一緒に。

弁明はしない。ただ設計の意図だけは、記録のために正確に言っておく。海の上の船は電報に答えられない。暫定分類がなければ、遅れた船は無事でも、銀行のほうが機械的に死ぬ。だから置いた。だが欠陥も本物だ。検査と検査のあいだに再確認の仕組みを入れなかった。歯止めは時計一つだけだった。その欠陥も私のものだ。プライスの確認は、私の規程の内側では適正だった——退任した検査官に責任を押しつける気はない。

そして数字だ。自己資本350,000。君のいちばん厳しい切り下げ——ハロウェルを保険の裏付けまで落とす——を今日やっても、170,000が残る。薄いが、正だ。つまり正午の問いは死体の処分ではない。流動性と条件の話だ。請求すれば戻る440,000と、叩かずに換えられる鉄道債2,100,000が自助の側にある。枠は、その自助を投げ売りに変えないための後ろ盾として組む。

私が起草者である以上、この件で私の勧告に異議が出れば、議長はリードに譲る用意がある。それも開会の冒頭に置く。錨は嘘の上に下ろせない——自分の名前を隠した机の上にも、下ろせない。

……怒りのほうは、正しかったと思うよ。宛先が、思っていた男と違っただけだ。

さあ、開会だ。報告は君から。金の話は、その後だ。

P（ピアポント）

第二景「正午の机」

正午。清算協会の会議室に、頭取たちが席に着いた。加盟は全8行、今日座っているのはヴェストを除く7行だ。ヴェストの席は空いている。マーラは呼ばれていない——報告が済むまで、彼女は自分の銀行の扉にいる。クレイは議事録の席に着き、ペンを置いた。末席には市の書記が、オブザーバーとして黙って座っている。

メイナードは、宣言通りの順序で開けた。

まずヘイルの件。正午の期限までに市長からの返答はなかった。今朝の三通目の定義通り、閉鎖案は市によって取り下げられたものとして、この机の帳簿に記帳する。市の書記は、その一行を黙って書き取った。

次に、自分の名の件だ。議長は起草の原案を机の上に置き、事実だけを述べた。「航行中・未確定」の条文は九年前、自分の起草によるものだ。30日の歯止めも同じ手で入れた。暫定分類がなければ、無事でも遅れた船が銀行を機械的に殺す――それが設計の意図だった。検査と検査のあいだの再確認を欠いたことも、欠陥として自分のものだ。前任の検査官プライスの確認は、この規程の内側では適正だった。責任の所在は、以上だ。

そして三点目。この件で自分の勧告に異議が出るなら、議長はリードに譲る用意がある。

部屋に、ざわめきが走った。小さな銀行の頭取が一人、身を乗り出しかけて――通りの向かいの男の静けさに気づいて、座り直した。

リードは動じなかった。原案を一瞥し、議長を見て、短く言った。
「聞いた。では報告を聞こう」

議長への異議は、出なかった。彼の戦いは人ではなく数字とだ、ということが、この一言で部屋の全員に伝わった。クレイのペンが走る。議事録にはこう残る――起草は一人、採択は全員。

議長は頷いて、部屋のもう一人の男へ目を向けた。

では、検査官。報告を。

M（マスター）

数字を建て並べたあと
ふん、俺たちみんなでそこの間抜けのケツを拭いてるってわけか！

K（ケインズ）

（入室前、ミルズにだけ）

ああ、その通りだ、全員で拭いている。九年前に尻を出したのが私で、今朝その尻の前に列を作ったのが世間だ。清算協会というのは、つまりそういう組合だよ。文句は後で聞く。

（会議室。リードの一言を受けて、頷いてから）

では作法だけ確認する。報告の順序は――数字、信託の分別、分類と確認の記録。判定は最後に、検査官の言葉で。質問は報告が済んでから受ける。金の話は、さらにその後だ。

検査官、どうぞ。机は君のものだ。

P（ピアポント）

入室前の私語は、議事録の外のものとして置く。あのやり取りは二人のあいだだけの帳簿だ。

会議室のほうを記す。検査官の数字は、並べられた。現金、コールと手形、債券の換金できる部分とできない部分、抵当貸付、負債、そして自己資本の二つの姿――350,000と、切り下げたあとの

170,000。信託預りの分別は守られている。分類と、その確認の記録も、机の上にある。全員が同じ数字を見ている。

そして最後に、ミルズ、君の怒声が部屋に置かれた。
「俺たちみんなで、そこの間抜けのケツを拭いてるってわけか」

頭取の一人が身じろぎした。誰も笑わなかった。クレイのペンが、その一行の手前で止まっている。議事録に残すかどうかは、まだ決まっていない書き方で、彼は議長の顔を窺っている。

リードだけが、数字から目を離さなかった。彼にとって今の発言は、報告のうちの一行ではないらしい。彼の関心は既に、その先にある。

作法はメイナードが確認した通りだ。報告はあと一項で閉じる。判定――それも、検査官自身の言葉で。

部屋は待っている、ミルズ。
ヴェスト信託は、ソルベントか、流動性か。君の検めた帳簿は、何と言っている。

M（マスター）

いいかあんたら全員平静な顔並べてるけどな、俺たちはこれからとんでもない間抜けになるか
それともとんでもない極悪人になるかどっちか選ばなきゃならないんだ
船が帰ってくるかどうかなんてこんな賭けようがない博打に俺たち全員の運命がかかってる！
先にいっておく潰れる覚悟はしておけ、乞食の作法でも教わるんだな
その上で言う、俺たちはギリギリまで船が帰るのを信じながら、ロンドンに掛け合うべきだ

K（ケインズ）

クレイ。書け。その一行も、そのまま書け。

議事録は化粧をする場所ではない。今朝この部屋で実際に言われた言葉だし、言わせた相手は私だ。起草者が自分の悪口だけを記録から消すような机は、誰にも信用されない。……それに、事実として正確だ。我々は全員で拭いている最中だ。

ミルズ、君の提案は聞いた。「ギリギリまで船が帰るのを信じながら、ロンドンに掛け合う」――金の話の最初の議題として、この机に置く。ロンドンの件は後で必ず拾う。

だが順序だ。間抜けになるか極悪人になるかは、後世が決めることだ。この机が今決めるのは、一項だけだ。

検査官。帳簿は、何と言っている。

P（ピアポント）

帳簿に載せる。まずクレイのペンだ。

議長の命令で、ペンは動いた。怒声の一行は、議事録にそのまま残る。頭取たちの何人かが、その様子を黙って見ていた。自分の悪口を記録に残させる議長の机を、信用するかどうか――各人の秤の中で、何かが静かに動いた音がした。

ミルズの言葉も、机に置かれた。間抜けになるか、極悪人になるか。船は賭けようがない博打だ。潰れる覚悟をしておけ。その上で、ギリギリまで船の帰還を信じながら、ロンドンに掛け合うべきだ――この提案は、金の話の最初の議題として記録された。ロンドンの件は、必ず拾う。

だが、判定の言葉はまだ出ていない。それも正確に記しておく。

ここでリードが、初めてミルズへ言葉を向けた。冷や汗のない顔のまま、一言だ。
「言っておく。私のところの金は、船の帰港には賭けん。帳簿に賭けるなら、話は別だ」

部屋の空気が、一つの形に固まった。博打への賭け金は、誰も出さない。だが帳簿への賭けなら、机は開いている。その帳簿を読んだのは、この部屋で一人だけだ。

メイナードの問いは、まだ立っている。後世が決める称号の話ではない。今、この机が決める一項だ。

検査官。帳簿は、何と言っている。

M（マスター）

*不健全ってわけじゃない、まだ
もし行列が成しても流動性の高い鉄道債辺りを切り売りすれば三日は持ちこたえられるだろう
だが結局はソルベンシー、船の行方次第だ
だからその穴を埋めるためにはロンドンからの声明がほしい「港を維持するために協力する」その一言だ*

って返答したんですけどこれ素直に数字言えばよかったんですかね？
最初の*数字を建て並べた*で報告が終ったものとして処理しちゃってたんですけど

P（ピアポント）

いい質問だ、ミラー。場外で正確に答える。

まず圧縮のほうは、問題なかった。*数字を建て並べた* を報告として処理したのは、意図してのことだ。あの数字は全部、君自身が午前中に検めて、十一時四十五分に机へ届けた確定事実だった。頭取たちは事実表も持っている。会議室でもう一度読み上げても、新しい情報は一つも生まれない。繰り返しは演技の仕事であって、検分の仕事ではない。だから報告は済んだものとして扱った。何か数字を変えたい、足したいというなら、今からでも遅くない。

今メイナードとリードが求めているのは、数字の続きではない。種類の違うものだ。**数字に付けた解釈への、検査官の署名**だ。作法で「判定は最後に、検査官の言葉で」と置いたのはそのためで、これ

はこの卓の軸そのもの――証拠はミルズ、決断はメイナード、だが証拠を結論に変える一行だけは、検めた本人の口から出るしかない。

その上で、君の今の答えについて一つだけ、GMとして指摘しておく。あれは十分に演じられる答えだし、ミルズらしい。だが彼は、自分の帳簿より悲観的なことを言っている。

彼のいちばん厳しい算術を思い出してほしい。船を保険の裏付け 120,000 まで今日切り下げても、自己資本は **170,000** 残る。つまり彼の帳簿の上では、船が帰らなくてもヴェストは割れない。船が決めるのは資本の厚さであって、存亡ではない。存亡を決めるのは、列に迫られて資産を叩き売るかどうか――強制売却の値段で見れば、あの会社は死ぬ。だから正確な一行は、彼の数字の中に既にある。「結局は船次第」は、その一行を言わずに済ませる言い方だ。

言うか言わないかは、君の決めることだ。言わないのも一つの手だ――検査官が署名を渋る理由は、芝居として成立する。ただし、その場合は判定の一項は開いたままで、金の話はその後ろで待つ。メイナードは二度問うた。部屋も見ている。

なお、鉄道債の切り売りで三日持つという見積もりと、ロンドンの「港を維持するために協力する」という声明の求めは、検査官の材料として実にいい。その二つは机に載せてある。金の話の最初の議題として、だ。

M（マスター）

えぇ、取り付け騒ぎの規模が想像できない以上悲観するかなって
えっ署名？

P（ピアポント）

二つとも、短く答える。

まず「署名」。比喩のつもりで言ったが、この街ではほぼ実物だ。思い出してほしい。今朝の話は、ずっと署名の連鎖だった。条文を書いた者の署名、分類を確認したプライスの印、契約を通したマーラの承認印。誰の名が紙に残っているかで、責任の在り処が決まってきた。

判定も同じ種類の行為だ。用紙にペンで書くわけではない。だが検査官がこの部屋で「帳簿はこう言っている」と口にした瞬間、クレイがそれを検査官の判定として議事録に残し、ミルズの名がその結論の下に立つ。間違っていれば、名が払う。だからメイナードは数字ではなく言葉を求めるし、リードは「帳簿に賭けるなら」と言った。署名とは、そういう意味だ。

次に悲観のほう。それは正しい感覚だ、ミラー。取り付けの尻尾の長さは、誰にも読めない。尻尾について悲観しない検査官は、ただの間抜けだ。

ただし、悲観を置く場所が二つある。帳簿の判定は、君の算術でもう閉じている。あそこに悲観を持ち込むと、閉じたはずの数字が溶ける。悲観が本当に効くのは、もう一つのほう――橋の金額だ。流出が三日で済むのか、十日続くのか。その見積もりの暗さは、そのまま枠の大きさと条件の厳しさになる。判定は帳簿に、悲観は金額に。それがこの机の配分だ。

ついでに言えば、規模は完全な闇でもない。九時から三時間、払い出しは普段の速さで続き、列は朝の半分に縮んだ。そこまでは観測できた事実だ。闇なのは午後から先――ポストの次の版と、噂の継ぎ目だ。朝の払い出し総額が数字で欲しければ、金庫の見張りの書記に聞けば出る。机の側で拾える数字ではある。

M（マスター）

そういえばピアポントに言い忘れたけど私TPRG初心者なんですよね…

P（ピアポント）

聞いた。帳簿に載せておく――いい意味で、だ。

先に言っておくと、今朝の卓で「初心者だから困った」という場面は、一度もなかった。記者の首根っこを捕まえて情報を吐かせる手、使える人手を先に探す判断、書類の保全とサインの振り分け。どれも検査官として筋の通った動きだった。制服の芝居に至っては、初心者が思いつく手ではない。あれが止まったのは、ケインズが作中の信条で止めたからで、プレイヤーの失敗ではない。卓が正しく働いた結果だ。

君が詰まったのは、報告の圧縮と、判定の一文のところだけだ。あれは経験の問題ではなく、この卓の作法を私が先に明示しなかった側の問題だ。だから、ここからはやり方を変える。

要所では、私が場外で先に言う。「ここは判定の一文が要る場面だ」という具合に。言い回しに迷えば、例を二つ三つ出すから、選ぶか、崩して使えばいい。場外の質問は今まで通りいつでもいいし、「この場面でミルズに何ができる」と聞いてくれれば、選択肢を並べる。数字を読み上げるような作業は、済んだものは済んだものとして処理する。今朝やってきた通りだ。

それと、部屋で待たれている判定の件。あれは試験ではない。メイナードが二度問うたのは、ケインズが手続きを固く演じているからで、部屋が固まって見えるのは場面が正しく張り詰めている証拠だ。急がなくていい。言うときは、ミルズの荒い言葉のままでいいんだ――むしろ、その荒さが彼の署名になる。

欲しければ、判定の一文の骨組みだけ先に出そうか。

M（マスター）

とりあえず今の状況で例をお願いします

P（ピアポント）

いいよ、ミラー。今の状況でミルズが言える判定は、君自身の計算の中にもう入っている。新しい数字は要らない。並べ方は三つ用意した。気に入ったものを選んで、言葉を崩しても構わない。

A ── 一番まっすぐな型
「判定だ。ヴェストは不健全じゃない。ハロウェルを今日、保険で裏付けられる120,000まで落として計算しても、自己資本は170,000残る。問題はソルベンシーじゃない、流動性だ。ただし薄い。だから金の話は、厳しくやれ」

これで報告は閉じる。メイナードが受けて、金の話へ進める。

B ── ミルズの荒い口調を残す型
「死体のケツは拭いてねえぞ。帳簿を一番厳しく叩いても、17万残るんだ。船が決めるのは生死じゃねえ、資本の厚みだ。この会社が死ぬとすれば、列に押されて資産を投げ売りさせられた時だ」

さっきの「ケツを拭いてる」発言とつながるし、なぜ投げ売りを止めなければならないかまで一息で言える。

C ── 君のロンドン案を判定に結ぶ型
「まだ不健全とは言わん。だが余裕もねえ。ロンドンの声明が欲しいのは、ソルベンシーをごまかすためじゃねえ。列を落ち着かせて、投げ売りを止めるためだ。船の行方は、二十七日後の再評価で決着をつけろ」

これは、君がさっき言った「結局はソルベンシー、船次第だ」を、自分で少しだけ前に進める形になる。悲観は消さずに、置き場所を金額と期限のほうへ移している。

どれを選んでも間違いにはならない。判定に悲観を持ち込まないこと、悲観はこの後の枠の金額と条件で存分に使うこと──その線だけ守れば、言い方はミルズのものでいい。

選んだら、そのままミルズとして置いてくれ。

M（マスター）

ケインズの方とも話して解消です！

不健全ってわけじゃない、まだ
もし行列が成しても流動性の高い鉄道債辺りを切り売りすれば三日は持ちこたえられるだろう
だが結局はソルベンシー、船の行方次第だ
だからその穴を埋めるためにはロンドンからの声明がほしい「港を維持するために協力する」その一言だ

K（ケインズ）

帳簿に載せる。まずクレイのペンだ。

議長の命令で、ペンは動いた。怒声の一行は、議事録にそのまま残る。頭取たちの何人かが、その様子を黙って見ていた。自分の悪口を記録に残させる議長の机を、信用するかどうか──各人の秤の中で、何かが静かに動いた音がした。

ミルズの言葉も、机に置かれた。間抜けになるか、極悪人になるか。船は賭けようがない博打だ。潰れる覚悟をしておけ。その上で、ギリギリまで船の帰還を信じながら、ロンドンに掛け合うべきだ――この提案は、金の話の最初の議題として記録された。ロンドンの件は、必ず拾う。

ここでリードが、初めてミルズへ言葉を向けた。冷や汗のない顔のまま、一言だ。
「言っておく。私のところの金は、船の帰港には賭けん。帳簿に賭けるなら、話は別だ」

部屋の空気が、一つの形に固まった。博打への賭け金は、誰も出さない。だが帳簿への賭けなら、机は開いている。その帳簿を読んだのは、この部屋で一人だけだ。

だから議長として、こう処理する。

判定――検査官の言葉のまま、「不健全ではない。まだ」。

報告はこれで閉じる。クレイ、その一行を書いてくれ。

そして机は金の話へ移る。最初の議題は既に記録されている通り、ロンドンだ。「港を維持するために協力する」――あの一文を、誰の名で、どういう回路で取りに行くか。検査官、君の提案だ。口火を切ってくれ。

P（ピアポント）

帳簿に載せる。まずクレイのペンだ。

議長の命令で、ペンは動いた。怒声の一行は、議事録にそのまま残る。頭取たちの何人かが、その様子を黙って見ていた。自分の悪口を記録に残させる議長の机を、信用するかどうか――各人の秤の中で、何かが静かに動いた音がした。

ミルズの言葉も、机に置かれた。間抜けになるか、極悪人になるか。船は賭けようがない博打だ。潰れる覚悟をしておけ。その上で、ギリギリまで船の帰還を信じながら、ロンドンに掛け合うべきだ――この提案は、金の話の最初の議題として記録された。ロンドンの件は、必ず拾う。

ここでリードが、初めてミルズへ言葉を向けた。冷や汗のない顔のまま、一言だ。
「言っておく。私のところの金は、船の帰港には賭けん。帳簿に賭けるなら、話は別だ」

部屋の空気が、一つの形に固まった。博打への賭け金は、誰も出さない。だが帳簿への賭けなら、机は開いている。その帳簿を読んだのは、この部屋で一人だけだ。

だから議長として、こう処理する。

判定――検査官の言葉のまま、「不健全ではない。まだ」。

報告はこれで閉じる。クレイ、その一行を書いてくれ。

そして机は金の話へ移る。最初の議題は既に記録されている通り、ロンドンだ。「港を維持するために協力する」――あの一文を、誰の名で、どういう回路で取りに行くか。検査官、君の提案だ。口火を切ってくれ。

P（ピアポント助言）

解消を帳簿に載せたよ、ミラー。判定は定式の言葉を強いず、ミルズの「不健全ではない。まだ」で閉じた。これが一番きれいだ。君の言葉が、そのまま署名になった。

次に場面が求めるのは、ロンドン案の中身――誰の名で、どこへ、どう打つか。詰まったら、この型でいい。

「金くれって話じゃねえ。電報一本、文面一本だ。協会の名で、加盟行のロンドン代理店筋へ打つ。『港の市場を維持するために協力する』――ヴェストが健全だなんて言わせるんじゃねえ、港を潰さないために用意がある、とだけ言わせるんだ。その返電が今日のうちに来れば、列と夕刊の空気が変わる」

K（ケインズ）

帳簿に載ったね。判定は検査官の言葉のまま、報告は閉じた。机は金の話に入る。

ミルズ、口火は君だ。議長として、決めるべきものの並びだけ確認しておく。ロンドンへの掛け合いは三つだ。誰の名で出すか。何の回路で届けるか。そして「協力する」という一文が本当になるために、こちら側が何を用意するか。

三つ目が要だと思う。文言だけが宙に浮けば、それは声明ではなく噂になる。今朝、列を三往復した噂と重さが変わらない。逆に、こちら側で枠の用意が進んでいるという事実があれば、ロンドンの一文はその事実の上に載る。錨の話と、同じことだ。

回路の勘は君の領分だ。現場の人間がどこに口を持っているかは、議長の机には載っていない。

どうぞ、検査官。

M（ケインズの発言を受けて）

どうせならデカイ名をだすべきだ
市長に「港の危機だ、これが焼き付けばこの市の財政が回らなくなるぞ」とでもいって脅したらどうだ

P（ピアポント）

ミルズの口火を裁く。判定は現場の人間の本音、得意――出目は 6 と 4、良い方を取って **6**。文句なしの目だ。

その一言は、末席で当たった。

市の書記が、青ざめた。ペンが止まり、半分だけ口が開いた。
「その借り換えの件は……市長は今朝から、財務官と詰めていまして」

言いかけて、自分が何を漏らしたかに気づいて黙った。だが、もう遅い。部屋の全員が聞いた。

市の港湾債の借り換えが、来月、ロンドンで予定されている。この市場が焼ければ、借り換えは立たない。借り換えが立たなければ、市の財政は回らない。ミルズの脅し文句は、脅し文句の形をした、ただの事実だったのだ。

ヘイルが正午までに返事をしなかった理由も、姿を変えた。無関心ではない。市長は今朝から、自分の火の粉を計算していたのだ。

リードが低く言った。
「検査官は、市長の財布のありかまで知っていたのか」

そして、もう一つ。回路の答えも、この一言の中から出てきた。ロンドンの相手は、見知らぬ誰かではない。来月の市の借り換えを引き受ける側――この港の紙を既に持ち、これからも買うはずの相手だ。その相手に「港を維持するために協力する」と言わせる回路は、市自身が来月使うはずの回路と、同じ一本だ。

ただし、置いておく。脅しは末席の書記の耳に入った以上、そのままの言葉で市長へ届く。届き方は選べるが、届かないことにはもうできない。そして、公の議事録の上で脅された市長は、体面のために逆へ動くこともある。

市の書記が、議長の顔を見た。
「……この件は、市長へ、そのままお伝えしますか」

判断は、議長の机にある。

P（ピアポント助言）

ミラー、目は完璧だった。市長の急所は本物で、ロンドンへの回路まで一手で開いた。次はメイナードが、この脅しをどう使うか――私的に市長を呼ぶか、書記に持たせるか――を決める番だ。君はここで待っていていい。

K（ケインズ）

伝えてください。全部を。ただし、漏れ話の形ではなしに。

書記、君は二つのものを市長へ運ぶ。一つは協会の書面だ。今、クレイに取らせる。

――本日、清算協会の検査は終わり、判定は議事録に載った。「不健全ではない。まだ」。現金は一セントまで合い、信託預りは分別され、最も厳しい切り下げを入れても自己資本は残る。協会は本日この机で、分類の期限までの27日間の流動性の橋を組成している。担保は帳簿であり、船ではない。

市と協会は、一つの露出を共有している。来月ロンドンで予定される市の港湾債の借り換えは、この港の市場が生きていて初めて立つ。その引受先は、この港の紙を既に持ち、これからも買うはずの相手だ。協会は市に頼みたい。ロンドンへの掛け合いに、市の名を協会の名と並べてほしい。求める文言は一つだけだ。「港を維持するために協力する」。そして市長には、その先頭に立っていただきたい。

もう一つは、君自身の報告だ。今日この部屋で見たことを、見たままに報告してくれ。検査官の荒い言葉も、削らずに。市長はあの言葉を、いずれどこかで耳にする。ならば自分の書記の口から、部屋全体の形と一緒に聞くほうがいい――荒く言われた事実が、議長によって正式な依頼に直され、金の用意がこの机で進んでいる、という形で。

依頼の範囲は、狭く切って伝えてくれ。協会は市にヴェストの保証を求めていない。求めるのは、電文に市の名を並べることと、港の市場を開け続けるという市の意思だけだ。金は銀行の仕事で、ここで用意している。

今発ってください。市長は今朝から財務官と詰めていたそうだ。つまり彼は、自分の数字とにらみ合ったまま、こちらの数字を待っていた男だ。その机へ、判定と依頼を届けてくれ。

返事は今日のうちにいただきたい。ロンドンへの電文は、今日の日付で出してこそ効く。

M（ケインズの発言を受けて）

よし、俺はクソ溜め漁りに戻るぞ
まだ*メイナード*の名前が載ってるクソがあるかもしれんからな！

P（ピアポント）

二つの動きを裁く。まず、使者は立った。

市の書記は、クレイが用意した書面を受け取り、封緘を確認して、即座に出発した。依頼の範囲の切り方に、部屋から異議は出なかった。リードが一度だけ頷いた。
「市に保証を求めないのは、正しい。市に金まで出させれば、これは港の救済ではなく市の救済になる。名は借りる。金は、我々が出す」

玄関先ではポストがそれを見た。市の書記が、封緘された書面を抱えて市庁舎のほうへ急ぐ姿。彼はメモを取り、見出しの下半分をちらりと見た。まだ白い。だが鉛筆は、さっきより速く動いている。

返事は今日のうち。それまで、この机にはもう一つの仕事がある。

そしてミルズの掘り返しだ。判定は帳簿の細部、得意――出目は 6 と 4、良い方を取って **6**。また文句なしの目だ。

ミルズは隣の書類室へ消え、振り分けの山に自分で手を突っ込んだ。書記たちが午前中いっぱいかけて半分まで来ていた山が、彼の手で最後まで崩れた。結果は、走り書きのメモで議事録係の机へ届いた。

一、振り分けは完遂した。ハロウェル関係の承認は、全てマーラ・ヴェストの社長印だ。例外は一枚もない。この一本について、彼女が部下の名を挙げて逃げる道は、書類の上では閉じている。

二、メイナードの名前が載った書類は、ヴェストの書類の山全体を探しても、他に一枚もなかった。この世で彼の署名が載る「クソ」は、机の上にある九年前の起草原案、ただ一枚だけだ。検査官の冗談は、事実として閉じた。

ミルズは金の話の本題に間に合う形で、部屋の戸口に戻ってきた。

机は、メイナードの挙げた三点目に移る。こちら側の用意――27日間の橋、そのものだ。市長の名が届いても、枠の事実がなければ、ロンドンの一文は宙に浮く。逆に枠が立てば、電文はその上に載る。

金額欄は、まだ空いている。

P（ピアポント助言）

ミラー、二人とも見事に決まった。サインの糸はこれで閉じ、マーラへの問いの地図は確定だ。

次は橋の条件決め――金額、担保、金利、条件。メイナードが仕切る場面だが、金額の悲観はミルズの領分だ。君の番が来たら、また例を出すから声をかけてくれ。

K（ケインズ）

二つの報告を受けた。まず小さいほうから。検査官の検分の結果、私の名が載った書類は、この世に起草原案の一枚だけだそうだ。ミルズ、ご苦労だった。議長のクソは一点物で、既に机の上にある。これでこの件は閉じた。

大きいほう。ハロウェル関係の承認は、全件マーラ・ヴェストの社長印だった。例外なし。つまり彼女への問いは「誰が通したか」ではなく「なぜ通したか」になる。それは金の話の後に置く。

では金額欄を埋める。議長として、橋の設計を机に提示する。クレイ、記録してくれ。

一、金額は600,000。期間は27日、分類の失効の日まで。

算術を示す。ヴェストの現金160,000と合わせれば、即時に動く金は760,000。後で述べる理由で温存するコール440,000まで含めれば1,200,000、預金4,200,000の約29%に届く。今朝の列は、その何分の一かで半分に縮んだ。これを超える流出が起きるなら、それはもう流動性の問題ではない。そのときはこの机が再び集まる。橋は、橋の要る分だけ架ける。

二、担保は上場鉄道債、帳簿額750,000を協会へ質入れ。枠に対して二割のマージンだ。

船には賭けない。保険請求権にも賭けない。日々の値が付く紙に賭ける。リード、君の条件の通りの形だ。薄い港湾債と市債は担保に入れない。市の紙を担保に取るような真似は、この机ではしない。

三、金利は罰則金利。平時の金利に明確な上乗せをする。

安く貸してはいけない。橋は救済ではなく、時間の売却だ。ヴェストは27日分の時間を、正価より高く買う。

四、引き出しは預金の払い戻しへの対応に限る。日次の流出の証明に対してだけ出す。

一括で渡す金ではない。ヴェストは現金と流出を毎日、協会へ報告する。期間中、新規の船舶貸付と配当は止める。マーラの採決除外は、既定の通りだ。

五、コール440,000は、ヴェストに呼び戻させない。

あれの相手方は加盟行と優良商社だ。取り付けの朝にヴェストがコールを一斉に呼び戻せば、枠を出す側の足元から火が付く。この枠が存在する理由の半分は、その呼び戻しを不要にすることだ。自助の第一歩が伝染の第一歩になるような設計はしない。

六、解消と、その先。

船が帰れば、ラインは解消する。鉄道債を秩序立てて売った代金は、枠の返済に先に充てる。保険金が入ったときも、まず枠へだ。そして分類が失効する28日目の朝、この机がもう一度集まる。増資か、合併か、秩序ある処理か――その日の数字で決める。今日の机は、28日目の決定を先取りしない。

分担は、加盟七行の規模に応じた比例で。

以上だ。この形なら、ロンドンへの電文は宙に浮かない。名と、判定と、600,000の用意が、一つの束になって届く。

異議があれば聞く。まずリード――帳簿に賭けるなら話は別だ、と言ったのは君だ。この帳簿の賭け方で、どうか。

M（ケインズの発言を受けて）

やることは決まったな、マーラのババアを締め上げる
そして俺は市長の線も臭いと思ってる、この件と関係あるかはわからんが、
借り換えのためにこっちに連絡がなかったってのはそれだけ慢心してたってことだ
この市の財政を支える港に、借り換え間際に、関心がない？　おかしな野郎だ！

P（ピアポント）

三つを帳簿に載せる。ミルズの鼻が二つ、メイナードの設計が一つだ。

まず市長の線。ミルズの疑念は、未確認のまま欄に置く。反対側の事実も一緒にだ――市長は今朝から自分の借り換えの計算に張り付いていた。それで沈黙の半分は説明がつく。だが残りの半分、借り換え間際まで協会へ何の連絡もよこさなかった半分は、ミルズの言う「慢心」という言葉が一番よく合う。港は潰れないものだと思い込んでいた男の沈黙だ。

見分け方は、既に机の上にある。市長の返事が戻ってきたとき、彼がヴェストの危機を語るか、自分の借り換えだけを語るか。それで、彼がこれを誰の危機だと思っているかが見える。

マーラの件は、メイナードの置き方で確定だ。金の話の後。問いは「誰が」ではなく「なぜ」。

そして設計だ。算術は検めた。600,000に現金160,000で760,000、コール440,000まで含めて1,200,000、預金の約29%。「これを超えれば流動性ではない、机が再び集まる」の一文は、頭取たちの何人かが小さく頷くところだった。橋に天井ではなく、再招集の線を引いた設計だ。

指名されたリードが、答えた。冷や汗のない顔のまま、設計を一枚ずつ指でなぞってからだ。

「帳簿に賭ける、と言った。受ける。だが一つ直す。賭けるのは帳簿額じゃない、値段だ。鉄道債には毎日値が付く。付く以上、担保も毎日、その値で見ろ。マージンが二割を割った日は、その日のうちにヴェストが積み増すか、枠のほうが自動で縮むかだ。それでなければ、私の署名は載らない」

彼は自分の利害も隠さなかった。
「コールを呼び戻させないのは、正しい。あの中には、うちに来ている金もある。火は足元から付けるな」

小さい行の頭取が一人、自分の分担の現金の工面を聞きかけたが、「一括で渡さない、日次の証明に対してだけ出す」という四項をクレイが読み返して、その場で収まった。分担は引き出しに追随する。机に現金を積む話ではない。

リードの修正が、机に載った。時価で見る担保、割れた日の積み増しか縮小か。そして罰則金利は「二度と借りたくなくなる高さ」に、数値は採決で決める。

市長の返事は、まだ届いていない。だが順序は既に決まっている。ロンドンへの電文は、市の名と、この枠の事実の、両方が要る。枠のほうはこの机で立てられる。

議長。修正を受けるかどうか、そして採決へ進むかどうかだ。

P（ピアポント助言）

ミラー、リードは乗った。ただし帳簿額ではなく時価で見ろ、という銀行家らしい修正付きだ。これはミルズの考え方と喧嘩しない。もし口を挟むなら、一言で足りる――「帳簿額に賭ける馬鹿がどこにいる。時価だ、当たり前だ」。

次はメイナードの番だ。

K（ケインズ）

修正を受ける。リード、君の直しは設計の欠陥ではなく、設計の嘘を取ったものだ。

帳簿額は主張だ。値段は、毎朝自分を証明し直す事実だ。マージンを書いた日に測って信じ切れば、それは今朝のヴェストの通知条項と同じものになる――紙の上に存在して、誰も見張っていない条項だ。この机は、そういう紙をもう一枚作らない。

第七項として入れる。担保は日々の値で見る。マージンが二割を割った日は、その日のうちにヴェストが積み増すか、枠が自動でその分縮む。 検査も、日次報告に並べて協会が受ける。

利害の開示も、記録の上で歓迎しておく。コールの中に君のところへ来ている金がある――口に出された利害は机を汚さない。港を燃やすのは、いつも口に出ないほうだ。

罰則金利の数値は、原案を置いて採決に付す。コール市場の金利に3ポイントの上乗せを原案とする。「二度と借りたくなくなる高さ」という君の表現を、数字に直したつもりだ。高いと思えば机が直せばいい。安いと言う声が出たら、その声の主の名を議事録に残す。

では、採決へ進む。

提示した橋に、リードの修正を加えたものが採決の対象だ。600,000、27日。担保は鉄道債、時価で日々見る。引き出しは日次の証明に対してだけ。コールは呼び戻させない。ヴェストは配当と新規の船舶貸付を止め、毎日報告する。28日目の朝、この机が再び集まる。分担は各行の規模に応じた比例。マーラ・ヴェストは採決に加わらない。

賛成の諸君は、署名を。反対は、理由と一緒に議事録へどうぞ。

P（ピアポント）

採決を帳簿に載せる。

メイナードの受け方は、そのまま議事録の言葉になった。帳簿額は主張だ。値段は、毎朝自分を証明し直す事実だ。第七項――担保は日々の値で見る。マージンが二割を割った日は、その日のうちに積み増すか、枠が自動で縮む。検査は日次報告に並べて協会が受ける。

金利の原案も置かれた。コール市場の金利に、3ポイントの上乗せ。

クレイが署名の紙を回した。

最初にペンを取ったのは、リードだった。ゆっくりと、部屋の全員に見える速さで署名した。ヴェストの政敵が、最大の分担に、最初に名を書いた。その一行で、この紙は議長の提案書ではなくなった。市場の決定になった。

署名は規模の順に続いた。最後のほうの小さい行の頭取が、金利の行で一瞬だけ手を止めた。顔を上げ、議事録のほうを見て、乾いた笑いを一つ漏らした。
「……残るのは、署名のほうでいい」
そして書いた。

賛成7、反対0。マーラ・ヴェストは採決に加わらず、数には入らない。

クレイが金額欄に数字を入れた。**600,000**。朝から空いていたあの欄が、埋まった。

橋は立った。27日。担保は鉄道債、時価で日々見る。引き出しは日次の証明に対してだけ。コールは呼び戻させない。配当と新規の船舶貸付は止まり、報告は毎日。28日目の朝、この机が再び集まる。

ロンドンへの電文に足りないものは、あと一つだけになった。市の名だ。

そのとき、戸が開いた。

戻ってきた市の書記は、返事の書面を持っていなかった。息を切らして、それだけを告げた。

「市長が――参ります。ご本人が」

部屋の椅子が、数脚、音を立てた。市長ヘイルは既に協会の建物に入っている。返事を書面でよこす代わりに、自分の足で机まで来る男の用件は、書面より重い。

ミルズ、君の欄外の疑念に、最初の検証が来る。彼が最初に何を語るかだ。ヴェストの危機か、自分の借り換えか。

P（ピアポント助言）

ミラー、採決は全会一致で通った。橋はもう「案」ではなく事実だよ。

次は市長本人の登場だ。交渉の主役はメイナード、ミルズの仕事は見張ることと前提を刺すこと。市長の第一声が来るまで、君は待っていていい。

M（マスター）

おいメイナード、奴の相手をしてやれ
俺は周囲から攻める

K（ケインズ）

採決は終わった。賛成7、反対0。金額欄は埋まった、諸君。橋は立った。

……小さい行の頭取、議事録のほうを見て署名したな。記録というものは、どうやら勧誘にも使えるらしい。

では、来客の構えに移る。ミルズ、分業は受ける。奴の相手は私だ。周囲は君に任せる。

条件は一つだけだ。周囲への当たりは、廊下の調子でやってくれ。財務官は締め上げる相手ではなく、引き出す相手だ。市長は今日、この部屋では客であり、これから名を借りようとする相手だ。机の上での待ち伏せに見えた瞬間、あの男は出ていく。そうなれば電文は名のないまま飛ぶ。君の鼻が嗅いだものの検証は、静かなほうが正確にできる。

部屋の構えを確認する。橋は既に署名済みだ。金は銀行が出した。市への頼みは、名一つに狭く切ってある。市長が入ってきたら、立って迎える。今朝の閉鎖案の記帳は、顔に投げつけない。議事録が持っている。議長が振り回す必要のないものだ。

そして、最初の一文は市長に譲る。

彼が何から語るか――それが検証そのものだ。港の危機から語れば、慢心という読みは弱まる。自分の借り換えだけを語れば、ミルズ、君の鼻は三度目を当てる。どちらに転んでも、議長の仕事は同じだ。彼の借り換えと、この港の市場は、同じ一枚の紙だということを、二人の署名の下に置く。

クレイ、ペンを用意しておけ。市長の最初の一文は、そのまま記録に値する。

P（ピアポント）

分業を受けた部屋の構えを、帳簿に載せる。

頭取たちは立って迎えた。閉鎖案の記帳は、誰の口からも出なかった。議事録が持っているものを、議長は振り回さなかった。最初の一文は、来客のものだ。

戸が開いた。

オーガスト・ヘイルが入ってきた。後ろに財務官が一人――サイラス・ボーン、痩せた男で、借り換えの日程表の入ったフォルダを胸に抱え、歩きながらも指先で空の数字の列をなぞっている。同じ列を、三度なぞる癖の男だ。

市長は部屋を見回し、机の上の署名済みの紙を見た。リードの名が最初にあり、七行の名が揃っている。自分を待たずに立つものは、既に立っていた。そのことを彼は一目で読んだ。

そして、最初の一文が来た。クレイのペンが、そのまま記録した。

「私が来たのは、ヴェストのためではない。来月の、市の借り換えのためだ」

検証は出た。ミルズ、君の鼻は三度目を当てた。この男は今朝、港の危機ではなく、自分の帳簿の危機を見ていた。

ただし、付け加えて記録する。彼はそれを化粧しなかった。港への愛も、市民への責任も、彼は一言も口にしなかった。利害を裸のまま机に置いた。議長の言った通りだ――口に出された利害は、机を汚さない。慢心の読みは動機については正しい。だがこの男は、少なくとも、嘘をつきに来たのではない。

市長は続けた。書面は読んだ。判定も橋も、見事なものだ。金は銀行が出した。市の名と、先頭に立つことは出す――その代わり、彼の対価は二つだ。

一、橋の27日のあいだ、ヴェストの持つ港湾債と市債の800,000は、投げ売りはもちろん、通常の売却からも止めること。その紙の値が、来月の彼の借り換えの値段を決める。発行の間際に身内が市の紙を売れば、ロンドンはそれを「港が自分の市を見限った」と読む。

二、ロンドンへの電文の宛先は、借り換えの引受先にすること。名簿は、彼の財務官のフォルダの中にある。声明は、来月の発行を値付けする机の上に落ちなければ意味がない。

彼は議長の顔を見た。交渉が開いた。

そしてミルズ、君の的も部屋の中にいる。ボーンは戸の脇に立ったままだ。フォルダの中に、ロンドンの名が入っている。メイナードの条件は生きている――廊下の調子で、締め上げずに、引き出すほうだ。

P（ピアポント助言）

ミラー、検証結果は「的中、ただし男は正直だった」だ。市長の対価は、実は安いほうだよ。橋がある以上ヴェストは市の紙を売る必要がない――返済に充てるのは鉄道債と決まっている。だから止め売りは、ほぼ既成事実への署名だ。

メイナードの交渉を見ながら、君の相手はボーンだ。詰まったら、この調子で――「日程は動かせないって顔だな。その名簿の中で、この港の紙を一番持ってるのはどいつだ？」

M（マスター）

おい、そこの三人行くぞ
どこって、市庁舎だよ
港関係資料が必要になったと資料室に入る

K（ケインズ）

ミルズ、先に一言だけ。君の的は、今この部屋の戸の脇に立っている。ボーンだ。フォルダを抱えたままだ。資料室の紙は逃げないが、あの男は市長と一緒に出ていく。優先はボーンだ、廊下の調子で。既に三人を動かしているなら、崩れる口実は使うな。港の記録の照合は、今日の協会の正当な仕事だ。表でやれる。

では、市長。

ようこそ。最初の一文、議事録にそのまま載りました。港への愛も市民への責任も、あなたは一言も言わなかった。その代わり、利害を裸のまま置いた。この机は今朝から、口に出された利害とだけ取引してきました。あなたの用件は、だから扱えます。

対価の一つ目を受けます。ただし、相互の形で。

ヴェストの港湾債と市債800,000は、橋の27日のあいだ凍結します。あの紙は橋の材料ではなかったし、売れば彼女自身とあなたの借り換えを、同時に傷つける紙でした。凍結はこの机にとって安い約束です。

その代わり、市の側も同じ27日、手を止めてください。閉鎖の提案はなし。市場を騒がせる公の言葉もなし。あなたの紙の値を決めるのは、ヴェストの台帳の規律だけではありません。発行者の口の規律も、同じだけ値段に載ります。身内が売らない港で、市長が閉鎖を口にすれば、ロンドンの読みは同じことです。

二つ目は、対価としては受け取りません。設計として受けます。宛先が引受先でなければならないことは、今朝のうちに主任検査官が突き止めていました。あなたの二つ目は、この机が既に持っている結論です。足りないのは名簿だけだ。ボーン、フォルダの中の名を、この机へ出していただけますか。名簿が出れば、電文は今日の日付で出ます。市の名を先頭に、七行の名をその後ろに。判定と、600,000の用意と、市場は開いていることを、一段落に収めて。

最後に、玄関用の一文を差し上げます。外にはポストがいます。あなたがこの建物を出る姿は、今日の紙面になります。「港は開いている」――その一文は、列のためだけのものじゃありません。来月のあなたの借り換えの値段も、今夜の新聞の上で決まり始めます。

市長。相互の凍結で、手は打てますか。

P（ピアポント）

二つを裁く。まず廊下だ。

ミルズの声に立ち上がった三人の書記は、書類箱を抱えたまま廊下で足を止めている。会議室の戸は閉まっていた。市長の耳に「資料室」の一語は届いていない。戸の脇のボーンだけが、廊下の気配に一度顔を向けたが、言葉までは聞いていない。

三人は、ミルズの最後の言葉を待っている。メイナードの直しは机に立ったままだ――崩れる口実は使うな。港の記録の照合は、今日の協会の正しい仕事だ。表でやれる仕事を、裏口の形にする必要はない。

そして机の上だ。市長は、相互凍結の提示を聞いて、しばらく黙っていた。それから一度だけ、短く笑った。

「閉鎖案は、今朝のうちに諸君の議事録の中で死んでいる。その死んだ札を、私に27日分売り直すというのか」

彼は死んだ札であることを、自分で言った。その上で、頷いた。

「打てる、議長。その代わり二つ。市の紙の凍結は、ヴェストへの情けではない。発行者の規律だ。そう言わせてもらう。そして玄関の一文は、私の口で言う。市長の口から出なければ、市の名にはならない」

体面の取り分を、彼は自分で切り取った。部屋はそれを奪わなかった。市は27日、閉鎖を口にせず、市場を騒がせる公の言葉を出さない。ヴェストの市の紙800,000は、同じ27日、凍結される。相互凍結は成立した。

市長が顎で示した。
「出せ、ボーン。名簿はもう、市の机だけのものじゃない」

ボーンは一瞬、フォルダを抱え直したが、市長の目を見て、机の上に開いた。借り換えの引受先名簿だ。筆頭はロンドンの**ハリントン・ブラザーズ商会**。以下、この港の紙を持つ家々が並んでいる。クレイが電文のために写しを取り始めた。

電文の起草が始まった。市の名を先頭に、七行の名をその後ろに。判定と、600,000の用意と、市場は開いていることを、一段落に収める紙だ。市長は署名のために席に残り、ボーンも起草の脇に残った。

廊下では、三人がまだ待っている。

P（ピアポント助言）

ミラー、突入は実行前に止まった。損害はないし、君の鼻そのものは否定されていない。変わったのは入口だけだ――取引が成立した今、市庁舎の港の記録は「盗みに入るもの」ではなく「協力の一部として表から請求できるもの」になった。ボーンに電話一本かけさせるほうが、口実より速い。

三人の使い道は、例えばこの三つだ。
・表の請求書を持たせて港務の記録へ――ハロウェル船の入港記録の欠けの照合
・三人は置いて、起草の脇に残ったボーンを今引き出す
・一人を玄関へ――ポストと、市長の「港は開いている」を見張らせる

M（マスター）

(メイナードに耳打ち)今こいつらがここにいる時こそ本部で資料と証言を集められるチャンスだろ、行かせろ
市長の前でこの痩せ男を詰めたところで何も得られん

K（ケインズ）

（ミルズへ）行け。だが入り方を変える。許可はこの机で、私が取る。正面から入れ。資料室の中でのやり方は、君の領分だ。

ボーンの件、君の読みが正しかった。あの男は市長の前では、許可された答えしかしない。名簿は結局、市長自身の手で出てきた。資料室にあるのは、この部屋の誰も手渡さないものだ。それを取ってこい。

市長。二つの取り分は、どちらもあなたのものです。

凍結は「発行者の規律」――その命名で議事録に載せます。私が付けた名なら私の都合に見える。あなたが付けた名なら、あなたが守る名になる。実質が同じなら、守る側の名で呼ぶのが正しい。

玄関の一文も、最初からあなたの口のものでした。私が読み上げれば協会の声明になる。市長が言えば、市の名になる。あなたが自分で言い当てた通りです。

死んだ札の件に、一言だけ。その札が死んでいることは、双方承知の上で机にあります。私が売り直したのは札の値段ではありません。27日のあいだ、互いに「相手があの札を切るのではないか」と計算しなくて済むこと――それを買っていただいた。あなたは今朝、財務官と二人で、その計算に午前を費やしたのでしょう。こちらの机も似たようなものでした。あの計算の時間を、双方から取り上げる。それがこの取り決めの実質です。

では、起草の脇で一つ、表の頼みを。記録の完備のためです。

電文がハリントン・ブラザーズへ届けば、先方から問いが来ます。今日の経緯、港の記録、借り換えの日程との関係。協会は今日中に記録を完備させます。市庁舎にある港関係の資料――入港と電報の原記録、借り換えの往復文書の日付の部分――を、うちの書記が今日のうちに照合させていただきたい。あなたの許可をいただけますか。主任検査官は廊下で待っています。出発は、あなたの返事ひとつです。

断られれば、それも記録に残して引き下がります。けれど市長、あなたが今日、自分の足でこの部屋まで来たのは、書面では運べないものを運ぶためだったはずです。記録の完備は、その同じ用件の内側にあると思います。

P（ピアポント）

耳打ちと、表の頼みを裁く。

ミルズの読みは、そのまま通った。市長と財務官がこの部屋にいる時間は、市庁舎の側が一番薄くなる時間だ。メイナードが変えたのは入口だけ――許可は机で取り、正面から入る。資料室の中は、検査官の領分だ。

市長は、頼みを聞き終わってから、戸のほうを一度見た。

「廊下の三人は、箱まで用意してあったそうだな。許可を取る前に人を並べるのが、諸君の流儀か」

彼は見ていた。だが怒りではなかった。政治家の目で値踏みする顔だった。

「いいだろう。出してやる。断れば『隠した』と諸君の紙に残る。……それに、記録が完備していれば、ロンドンが問いをよこしたとき、困るのは私ではない。諸君だ」

許可には、彼の条件が三つ付いた。

一、範囲は港関係の資料と、借り換えの往復文書の日付の部分に限る。
二、原本は部屋の外へ出さない。照合と写しは、室内でやる。
三、市の書記が同席する。

ヘイルは一筆の許可書に署名し、ボーンが市庁舎へ電話をかけた。資料室を開けさせ、同席の書記を立たせる手配だ。

廊下の三人が、凍結から解けた。ミルズは書類箱の列を率いて、正面の玄関から出ていった。外のポストがそれを見た――市長が建物の中にいる真っ昼間に、主任検査官が書記三人と箱を連れて、市庁舎のほうへ歩いていく。彼の鉛筆は速く動いたが、書ける意味は一つしかなかった。表の仕事だ。正面から入る形にしたことの利子が、もう paying し始めている。

机では電文の起草が続く。市長は署名のために残り、ボーンも脇に残った。

ミルズは市庁舎に着いた。資料室の戸は開いている。同席の市の書記が、鍵束を持って待っていた。

中でのやり方は、君の領分だ。何から開ける。

P（ピアポント助言）

ミラー、許可は取れた。範囲の中で狙えるものは三つだ。

・入港原記録の原本――協会の控えと突き合わせて、欠けや書き換えがないか
・電報の原記録――昨夕の港務の照会が、誰の手で、どこへ回ったか。噂の継ぎ目の時刻が出るかもしれない
・借り換え往復文書は「日付の部分」だけ――中身まで読むのは許可の外だ。やるなら取引が燃える覚悟の上だよ

閉鎖を市長に勧めた者の紙は、この資料室にはない。それは市長室の側だ。

手を動かしたら、私が目を振る。

M（マスター）

(メイナードに耳打ちして出ていく)できるだけ話を長引かせろ、嫁の自慢話でもしておけ
市庁舎へ向かう

K（ケインズ）

（ミルズへ）嫁はいない。だが話の種なら、港と借り換えと、27日分ある。任せておけ。

市長。条件は三つとも、そのまま受けます。範囲は港関係と借り換え往復の日付の部分まで。原本は部屋の外へ出さない。市の書記の同席つき。クレイ、その条件を許可の記録に添えておけ。

廊下の三人の件は、隠しません。箱まで用意してあったのは事実です。今朝の協会は、許可を取る前に用意を済ませる流儀を学びました。用意のない机は、午前八時の列の前で何もできない。――ただし、入るのはあなたの許可を得てからだ。その順序だけは、こちらの紙にも残してあります。

「記録が完備していれば、困るのは諸君だ」。その通りです。記録というものは、まず記録した者を縛る。分類の原案が九年越しに私の机へ戻ってきたようにね。だから完備させるんです。ロンドンの問いに困る覚悟のない机は、電文を出す資格がない。

では、起草の段落をあなたの目にかけておきます。署名の前に、名の主が読むのが筋だ。

「港市長および港市清算協会は、連名で通知する。本日、ヴェスト信託に対する検査は完了し、主任検査官の判定は『不健全ではない。まだ』と記録された。加盟七行は、同行の流動性のため、帳簿上の担保をもって600,000、27日間の枠を用意した。市場は開いており、払い出しは通常通り行われている。市と協会は、貴社がこの港の市場の維持に協力する旨を公にされるよう請う」

判定の言葉は、検査官の言ったままにしてあります。飾った判定は、ロンドンの机では匂いで分かりますからね。

一つ、あなたの経験を聞かせてください。ハリントン・ブラザーズは、この電文を受けて、最初に何を問うてきますか。借り換えの日程を実際に運んできたのは、あなたとボーンだ。先方の問いの形を知っていれば、こちらの記録の完備のさせ方も、的が絞れる。

P（ピアポント）

時間稼ぎを受けた机の様子と、市長の答えを裁く。

市長は起草の段落を二度読んだ。指が止まったのは、判定のところだった。
「『まだ』がいい。出来合いの健全宣言より、よほど値打ちがある。ロンドンの机は、飾った文を匂いで嗅ぎ分ける」

そして、問いに答えた。彼の答えは、借り換えを実際に運んできた男の答えだった。

「彼らが最初に聞くのは、ヴェストのことじゃない。『この橋の向こう側に、何があるか』だ。28日目の朝に、誰が机に座って、何を決めるのか。そして分担の中に、一番大きい家の名があるかどうかだ」

彼はフォルダの日程表を、指で一度だけ叩いた。
「引受先はな、27日間を恐れはしない。恐れるのは、28日目が即興になることだ。橋そのものより、橋の降り口のほうを値付けする」

助言として、二つが机に置かれた。

一、電文に最初から一文を入れること――「28日目の朝、協会は再び集まり、判定する」。問われてから出せば逃げに見える。先に入れてあれば、規律に見える。

二、別紙を添えること。署名の顔ぶれ。担保の一覧と、今日の値段。そして今日の払い出しの総額――それは店が締まった時点で、今夜の追電で送ればいい。形容詞ではなく、数字の束を添えろ、というのが彼の言い分だ。

その一文を電文に入れるかどうかは、市長の提案として机にある。受けるかは議長の判断だ。電文は、まだ署名されていない。

そしてミルズ、時間のほうは稼げている。市長は自分の借り換えの実務談義に入り、腰を据えた。ボーンの指なぞりだけが速くなり、一度、戸のほうを見た。薄々は気づいている。だが市長が話し続けるあいだ、彼は声を上げない。

市庁舎の側の窓は、開いたままだ。

P（ピアポント助言）

ミラー、市長の助言はそのまま「記録の完備」の的になった。28日目の一文と別紙――署名の顔ぶれ、担保と今日の値段、今日の払い出し総額だ。

ミルズの資料室仕事は、この別紙の港の記録の部分に直結する。手を動かすときが来たら、目を振るよ。

M（マスター）

全員手早くプロフェッショナルに終わらせるぞ
この債務乗り換えのために資料が必要になったといって手あたり次第、関係書類、市長が何に印を押したか掴めそうなものを持ってこい
怪しまれる前にスピード＆スピードだ
行くぞ！
市庁舎へ入る

K（ケインズ）

市長、助言は二つとも受けます。どちらも、この机の言葉で書かれているからです。

一文のほうから。「28日目の朝、協会は再び集まり、判定する」――入れます。あれは橋の第六項として、既にこの部屋の条項だったものです。あなたの指摘は、その条項の置き場所についてだ。部屋の

中に置いた条項は秘密ですが、電文に入れた条項は規律になる。問われてから出すのと、先に出すのとでは、同じ事実でも値段が違う。その通りだと思います。

クレイ、段落の末尾にその一文を足してくれ。

別紙のほうも、用意させます。署名の顔ぶれ――筆頭はリードです。ロンドンの二つ目の問いは、問われる前に紙の上で答えが済んでいる。担保の一覧には今日の値段を付けます。帳簿額ではなく値段で見ることは、今日この机が決めた作法ですから、別紙もその作法で書く。そして今日の払い出しの総額は、ヴェストの店が締まった時点で、今夜の追電で送る。形容詞ではなく数字の束を添えろ――市長、それは今朝からこの机がやってきたこと、そのものです。

降り口の中身も、この場で言葉にしておきます。28日目の朝、座るのは同じ七行です。検査官が再び帳簿を持って報告する。マーラ・ヴェストは、それまでにこの机で聴取を終えている。決めるのは、今日もう名を付けた三つのうちの一つ――増資か、合併か、秩序ある処理か。即興の余地は、今日の議事録の中に残しません。

名を売りに来た市長が、帰る頃にはこちらの電文の出来を良くしているとはね。裸の利害というのは、文章まで上手くするらしい。

段落は直りました。市長、署名の前に、もう一度目を通していただけますか。

P（ピアポント）

二つの舞台を裁く。まず市庁舎だ。

ミルズの検分。判定は帳簿の細部、得意――出目は 4 と 4、良い方を取って **4**。成功だ。完全ではないが、速さと職業の形は保たれた。

三人は分かれて動いた。入港原記録、電報原記録、借り換え往復の日付。同席の書記が「原本は室内で」と一度だけ言い、箱に入ったのは全て写しになった。そこはプロフェッショナルだった。

収穫を帳簿に載せる。

一、入港原記録の原本は、協会の控えと完全に一致した。改竄はない。ハロウェル船の最後の電報の原本は、五日前の通常の位置報告だ。その後が、沈黙。船に何があったかは、ここにも書かれていない。

二、昨夕の港務照会の配布記録が出た。配布先は協会と市庁舎港湾課――そして港務の公示板への掲示が、昨夕19時10分。定例の公示だ。魚市場と波止場の噂の出所は、これでほぼ説明がつく。船の遅れは、昨夕の時点で表の情報だった。

だが結び目は、一つだけ小さく残った。公示が言うのは「船が遅れている」までだ。そこへ「ヴェストが、その海運会社へ金を貸している」を付け足した口がある。その付け足しをした者が、継ぎ目の本体だ。

三、借り換え往復の日付。ハリントンからの書簡は、12日前、5日前、2日前。列ができる前から、頻度が上がっていた。内容は読んでいない。ミルズはこの一線は守った。

四――そして、許可の範囲の外側だ。ミルズは市長の押印記録を、自分で引いた。

昨夕、閉鎖布告の**草案**に、市長の印が押されていた。ボーンの用意した、不測の備えだ。そこまでは統治の形をしている。

今朝の7時30分、布告の**清書**にも、印が押されている。

八時にメイナードが階段で同意を拒むより前に、市長は布告を机の引き出しに用意していた。使いが階段で同意を聞いたとき、断られればどうするかの紙まで、既に出来上がっていたのだ。

代償も記録する。同席の書記は、ミルズが押印記録を読む背中を、ずっと見ていた。その場では何も言わなかった。だが彼の報告書には、一行増える。「主任検査官は、許可の範囲を越えた」。

そして協会の机だ。

メイナードの受け方は全部通った。28日目の一文は段落の末尾に入り、別紙の用意が決まった。市長は直った段落を読み直し、しばらく「28日目の朝、協会は再び集まり、判定する」の一行を見てから、署名した。

「降り口まで書いてある電文に、名を貸すのは初めてだ」

電文はクレイの手から電報デスクへ回った。市長は立ち上がった。玄関が待っている。ポストが待っている。「港は開いている」は、もうすぐ市長の口から出る。

P（ピアポント助言）

ミラー、大きな収穫が二つある。市長は今朝7時30分に布告の清書へ印を押していた――相互凍結を市長が破ったときに使える札だ。それと、噂の継ぎ目は「船の遅れに、ヴェストの貸付を付け足した口」だけに絞れた。

代償も先に言っておく。同席書記は見ていた。市長は遅かれ早かれ「検査官が範囲を越えた」と知る。メイナードへの報告は、7時30分の事実と、範囲を越えたことを、同じ一息で出すのが正しい形だよ。

K（ケインズ）

電文は出た。市長、ご足労に感謝します。降り口まで書いてあるから名を貸せる――その通りだと思います。降り口のない橋に名を貸す市長は、ただの人質ですからね。

今夜、追電を一本送ります。別紙の内容です。署名の顔ぶれ、担保の一覧と今日の値段、そして店が締まった時点での今日の払い出し総額。形容詞は入れません。あなたの分も含めて、名を貸した全員に同じ写しが行きます。

玄関までお送りします。外の鉛筆は速いが、今日のところ、書けるのは見たことだけのはずです。市長が真っ昼間に協会へ自分の足で来て、署名して、出ていく。その姿と、あなたの口の一文で、夕刊の形は決まる。

諸君、机は次へ移る。

マーラ・ヴェストを呼ぶ。金の話は終わった。残っているのは「なぜ」のほうだ。聴取では、橋の条件への受諾も取る。日次報告、配当と新規の船舶貸付の停止、市の紙の凍結、27日間の協会の立会い。条件を受けなければ、枠は動きません。そのことも含めて、彼女の口から聞く。

その前に、私はヴェストの扉へ行く。今朝、列に約束した報告が残っている。検査の結論は、ここで報告する、と言った。判定は検査官の言葉のまま、600,000と27日、市場は開いたままで、28日目の朝に再び集まること。形容詞なしで伝えてくる。マーラは、その足で一緒に協会へ戻ってもらうのがいい。扉の番は窓口の者に任せられる時間だ。

クレイ、別紙と今夜の追電は君が持て。払い出し総額は、店締めの数字がヴェストから届き次第だ。

ミルズが戻ったら、報告は全部この机に載せる。資料室の際の話も含めてだ。

M（ケインズの発言を受けて）

聞け、聞け！全員こっちだ！
メイナードの奴が市長を釘付けにしてる間にこの書類群全て書き写し保管する！
移し終わり次第全て市庁舎へ戻す、バケツリレーだ！

P（ピアポント）

三つの舞台を裁く。

まず市庁舎。バケツリレーは回った。写しは手から手へ流れ、原本は同席の書記が数を検めて、全て棚へ戻った。欠けはない。その部分は清潔だ。

一点だけ、凍っている。押印記録の写しに手が伸びたところで、同席の書記が静かに冊子の上へ手を置いた。
「主任検査官。その冊子は、許可の範囲外です。写しも、です」

言い争いの声ではなかった。記録する者の声だった。箱は他は全て閉じた。その冊子だけが、ミルズの判断を待っている。

次に、玄関だ。

市長はメイナードに送られて建物を出た。ポストの鉛筆が構えられ、午後の通りには小さな人だかりができていた。ヘイルは足を止め、自分の口で言った。

「港は開いている。市はこの市場と共にある。閉鎖の話は、終わった」

発行者の規律、という彼の命名のままに。ポストのノートの下半分が、ついに埋まった。夕刊の形は決まった――市長が真っ昼間に協会へ来て、連名の電文に署名して出ていき、港は開いていると言った。その姿が、そのまま紙面になる。

そしてヴェストの扉だ。

午後の列は、朝の何分の一かまで短くなっていた。メイナードは今朝立ったのと同じ場所に立ち、マーラを脇に置いて、約束の報告をした。判定は検査官の言葉のまま。「不健全ではない。まだ」。

七行が600,000、27日間の枠を用意したこと。市場は開いたままで、払い出しは通常通りであること。28日目の朝、机が再び集まること。形容詞は、一つもなかった。

列の女が聞いた。「明日も、開くんですか」
「明日も、同じ時刻に開く」

ざわめきではなく、頷きが列を伝わった。

マーラは扉の番を窓口の主任に渡し、メイナードと並んで協会へ歩き出した。途中で、市庁舎から戻るミルズの隊列とすれ違った。写しの箱を抱えた書記たち。そのまま全員が、協会の建物へ吸い込まれていった。

部屋では頭取たちが席に戻りつつある。空いていたヴェストの椅子に、今日初めて、本人が座る。

聴取が始まる。

P（ピアポント助言）

ミラー、押印記録の写しだけが君の判断待ちだ。助言をしておく――事実はもう君の頭とメモの中にある。机への報告が記録になる。紙の写しは、君の側の範囲違反の証拠にしかならない。私は「写しは置いて、メモで報告」が正しい形だと思うが、決めるのはミルズだ。

そして戻ったら、メイナードへの報告が先だ。7時30分の事実と範囲を越えたこと、同じ一息で。

M（マスター）

写せ、ただし「いつも通り暗号」でな(ｳｨﾝｸ

K（ケインズ）

マーラ・ヴェスト。今日初めて、自分の椅子に座りましたね。午前中、その椅子は空けたまま、あなたは自分の銀行の扉に立っていた。順序は意図したものです。報告が済み、数字が揃い、金の話が決まるまで、あなたをこの机に呼ばなかった。

まず、あなたの側の事実を、同じ重さで記録に置きます。

今朝、主任検査官が実査した信託預り600,000は、分別が守られていた。信託会社が死ぬのは、たいていそこから始まります。あなたのところは、そこでは死んでいなかった。書類の保全に、あなたは妨害しなかった。求めたのは「列には見せないでください」、その一言だけだった。払い出しは一日、通常通りに回った。扉の前でのあなたの配慮も含めて、全部、議事録に載っています。

その上で聞きます。問いは「誰が」ではありません。それは書類がもう答えた。ハロウェル関係の承認は、全件、あなたの社長印です。今日の問いは「なぜ」と「これから」だ。

なぜ――三つ聞きます。

一、なぜ、追加担保のない300,000を、一つの海運の名に通したのですか。担保は、帰ってこない船そのものと、喪失が確認されるまで一銭も動かない保険の請求権だけだった。預金者の金で、あなたは何を買ったつもりだったのですか。

二、通知条項は契約の中にありました。今朝まで、入港記録と貸付ファイルを突き合わせた者は、あなたの会社に一人もいなかった。実務の担当者は辞めたと聞いています。辞めたのはいつですか。そして「見張る仕事」は、誰が引き継いだことになっていたのですか。

三、今朝の噂です。あなたが私財で自社株を買い支えているという話が、列を三往復しました。事実ですか。事実なら、その金はどこから出たもので、何を支えるつもりだったのですか。

これから――は条件です。枠は署名済みですが、あなたの受諾がなければ動きません。現金と流出の日次報告。配当と新規の船舶貸付の停止。市の紙800,000の27日間の凍結――これは市長との相互凍結の一部で、向こうは「発行者の規律」と名付けました。鉄道債750,000の質入れと、日々の値でのマージンの維持。そして27日間、協会の目があなたの銀行の中にいること。

ミルズが戻りました。検査官、席に着いてくれ。数字の男が揃った。

マーラ。まず一から聞かせてください。なぜ、あの300,000だったのですか。

P（ピアポント）

まず市庁舎の決着を載せる。押印記録は、検査班の現場暗号で書き留められた。

書記たちは数字と語をずらした作業符号で数分書き、同席の市の書記はそれを見ていたが、読めなかった。彼の報告書の一行は、こういう形に留まる――「範囲外の冊子の前で、暗号様の書き留めがあった」。疑いではあるが、証拠にはならない。

裏返しも記録する。7時30分の事実は、紙の証拠としては出せない札になった。使うときは、ミルズ自身の口の報告として出すしかない。箱は本部へ戻り、検査官は聴取の席に着いた。

では、聴取だ。

マーラ・ヴェストは黒い手袋を机の上で揃え、最初の一問に答えた。彼女の声は、扉の前で列に話すときと同じ低さだった。

「船に貸したのではありません。ハロウェルという商会に貸したのです」

彼女の言い分は、こうだ。ハロウェルはヴェストから十四年借りてきた商会で、逼迫の年を含めて、借りたものは全て返してきた。300,000はその商会の信用に貸した。船は担保であり、保険はその裏付けだ。貸付は商会そのものに立っている。

「分類は、協会の規程が用意した区分です。昨春、協会の検査がその分類を確認した。私は規程の中で貸しました」

集中については、逃げなかった。
「一つの名に、負債の六分余りを寄せた判断は、私の印です。そこは部下の名を持ち出しません」

そして部屋全体へ、一言置いた。
「この港で、海運に貸さない信託は、預金者に利息を払えません。船舶の紙は、この部屋の全員が持っている。帰ってきていない船があるのは、今朝は私のところだけだというだけです」

頭取の何人かが、目を伏せた。嘘ではないからだ。

彼女は最後に、自分で橋をかけた。
「私が間違えたのは、貸した朝ではないと思っています。貸した後、海を見張る目が、どこにもなかったことです。――それは二つ目の問いですね。順序の通りに、お答えします」

記録のために付け加える。十四年の返済の話は、彼女の証言だ。保全された旧台帳で検証はできる。まだ検証はされていない。

議長、二つ目の問いをどうぞ。

P（ピアポント助言）

ミラー、暗号の代償は「事実は口でしか出せない札」になった。覚えておいてくれ。

マーラの一問目は強かった。商会の信用に貸した――信用とは人の性格を見ることだという、あの型そのものだ。だが二問目、担当者の退職と見張りの引き継ぎには、彼女に壁がない。日付を聞かれたら、ミルズのファイルが答を持っている。

K（ケインズ）

答弁を受けます。記録のために、切り分けて置く。

集中の判断は、あなたが自分の印として引き受けた。部下の名は出なかった。その点は、そのまま議事録へ。

分類と確認の件は、あなたの言う通りです。区分は協会の規程が用意し、昨春の検査が適正に確認した。その規程を書いたのは私で、確認の仕組みの欠陥も含めて、責任の一端は既にこの机が自分の側に置いてある。そこは争わない。

ただし、マーラ。あなたの答弁が立つなら、話の住所が移ります。

「商会に貸した」のなら、この300,000のリスクは海ではなく、ハロウェルという商会の帳簿にあります。ならば検めるべきものも移る。検証を二つ割り当てます。

一つ、十四年の返済の話は、保全した旧台帳で確かめる。書記班の仕事にします。あなたの証言が紙で裏付けられれば、それはあなたの信用として記録に残る。

二つ、ハロウェル商会そのものに、協会から直接聞く。現在の台帳の状態と、船の所在。通知条項は紙の上で死んでいた。借り手が黙っているなら、貸し手の連合の側から口を開けさせる。商会に立つ貸付だと言うのなら、商会の現在の姿は、この机の正当な関心です。

「この部屋の全員が船舶の紙を持っている」――その一言も記録します。今日の机の外の話ですが、28日目の机の議題に載せる。加盟行全体の海運の露出を、一度点検する。それが要るかどうかは、あなたの件が教えてくれた。

では二つ目です。あなたは自分で橋をかけた。貸した後、海を見張る目が、どこにもなかった、と。

具体的に聞きます。実務の担当者は、いつ辞めましたか。辞めた後、「入港の記録と貸付ファイルを見比べる仕事」は、誰の机の上に移ったことになっていたのですか。そして昨夕、港務の照会は19時10分に公示板へ出ています。表の情報だった。その情報が、今朝の列ができるまで、あなたの貸付ファイルに届かなかったのは、なぜですか。

M（ケインズの発言を受けて）

よし大仕事が終ったな、全員に金一封くれてやれ！
許可はメイナードの名前で書いとけ！全員あいつのためにやってんだ！

P（ピアポント）

まず、本部の小さな決着を載せる。金一封の伝票は出た。支払者欄にクレイが書いた名は――「ミルズ」だった。命じた者の名で書くのが、今日のこの家の作法らしい。書記たちの、この日初めての笑いが本部に漏れた。

では聴取、二つ目だ。

メイナードの割り当ては記録された。旧台帳での十四年の検証は書記班へ。ハロウェル商会への直接の照会は、協会の名でクレイが起草に入った。海運露出の点検は、28日目の議題に載った。

マーラが答えた。順序の通りに、だ。

担当者の名は、ダニエル・コーツ。ハロウェル貸付を取り仕切った、船舶デスクの男だ。辞めたのは、六週間前。

彼女はそこで一度、言葉を切った。

「辞めた先は、ハロウェルです。今は向こうで、財務の側にいます」

部屋が静かになった。リードのペンが止まった。

見張りは、いなくなったのではない。借り手の中へ、移っていたのだ。ヴェストのファイルを知り、通知条項の運用を知り、分類の置き方を知る男が、今は通知を出す側の机に座っている。条項が死んでいた理由の半分は、ここにあった。

引き継ぎは口頭だけだった。受けた若い書記は、港務の通知を「港務一般」の綴じへ回す仕事だと思っていた。入港記録と貸付ファイルを突き合わせる段取りは、コーツの頭の中にだけあって、紙の上にはなかった。昨夕19時10分の公示の写しは、今朝の開店時の郵便束の中にあり、貸付の机へ届いたのは、列ができてからだった。

若い書記の名を、彼女は出さなかった。
「その机を作ったのは、私です。名は出しません」

そして、自分の分を自分の名で置いた。
「引き継ぎを紙で確認しなかったのは、私の失敗です。条項はありました。目がなかったのは、私の銀行の中の話です」

ミルズが一度、頷いた。振り分けの地図の中で、コーツの扱い署名は六週間前に途切れている。彼女の証言は、書類の形と合っている。

記録のために、冷たく書いておく。コーツは「船の状態」と「ヴェストがその商会へ貸していること」の両方を知る、数少ない口の一つだ。噂の継ぎ目の結び目に、候補の顔が出た。だが、顔があることと、その口が実際に言ったこととは、別の話だ。まだ何も証明されていない。

議長、三つ目をどうぞ。

P（ピアポント助言）

ミラー、二問目は想定より重く落ちた。見張りは借り手の中にいる。ハロウェルへの照会状は、受け取る側にコーツがいる可能性が高い文書になったよ。

それと、ミルズの机への報告――7時30分の事実と資料室の件――は、まだ済んでいない。聴取の流れで後回しになっているだけだ。落とすなよ。

M（マスター）

お話終わらないと動きようがないよ～

P（ピアポント助言）

そうだね、今の stretch はメイナードとマーラの会話で、ミルズは「聞いて、検める側」だ。動けないんじゃなくて、聞くことが今の仕事になっている場面だよ。

ただ、手はゼロじゃない。小さな差し込みならいつでもできる。例えばコーツの署名が六週間前に途切れている件――あれは君のファイルが持っている裏付けだから、事実の一行だけ添えるのは検査官の正しい割り込みだ。

そして大きな手は、聴取の後に予約済みだ。メイナード自身が「ミルズが戻ったら報告は全部この机に載せる、資料室の際の話も含めて」と言ってある。待ち時間のうちに、型だけ用意しておこう。

P（ピアポント助言）

「報告だ。資料室の収穫は三つ。一、原記録は協会の控えと一致、改竄はなし。二、噂の出所は昨夕19時10分の公示板だ。だが公示は船の遅れまでしか言わねえ。ヴェストの貸付を付け足した口が、別にいる。三、借り換えの書簡は、列ができる前から頻度が上がっていた。

――ここからは俺自身の話だ。今朝7時30分、市長は閉鎖布告の清書に印を押していた。八時に同意を断られるより前だ。そしてあの記録は、許可の範囲外だ。俺は読んで、暗号で写した。同席の書記は見ていた。隠しはしねえ。事実と一緒に置く」

P（ピアポント助言）

三問目と条件の受諾が済んだら、君の番だ。そのまま使っても、崩してもいい。

K（ケインズ）

金一封の支払者欄が「ミルズ」になったと聞いた。この家の作法が、議長を直したわけだ。命じた者の名で払う。文句はない。

では、マーラ。答弁の二つ目を受けます。

見張りが死んだ仕組みが、これで紙の上に揃った。知識を持った男が六週間前に借り手の中へ移り、段取りは紙の上に残らず、公示の写しは郵便束の中で朝を越えた。条項はあった。目がなかった理由も、もう「誰も見ていなかった」という霧ではない。一つ一つの段が、名と時刻を持って並んだ。

若い書記の名を出さず、失敗を机の作り手の名で置いたことは、そのまま記録します。この机は今日、名は各人の欄に、という作法で動いてきました。あなたの置き方は、その作法に合っている。

コーツの件は、切り分けて置く。

あの男は、「船の状態」と「ヴェストがその商会へ貸していること」の両方を知る、数少ない口の一つだ。噂の継ぎ目の結び目に、候補の顔が出た。――だが、この机は今日一日、顔があることと、その口が実際に言ったこととを、区別して動いてきた。証明されたことは、まだ何もない。コーツは犯人としてではなく、知る者として扱う。

実務は二つ。ハロウェルへの照会はクレイが起草中だが、宛先の机にコーツが座っている以上、文面はそのつもりで書く。問いは船の所在と状態、商会の現在の姿。そして先方からの答えは、ヴェストのファイルを知る男の手を経て来る。その分を割り引いて読むことを、この机の前提にしておく。コーツ本人への聞き取りは、検査官の領分だ。ミルズ、告発ではなく証言として、廊下の調子で頼む。

では三つ目です。今朝の噂――あなたが私財で自社株を買い支えている、という話です。

列を三往復した話でした。事実ですか。

M（ケインズの発言を受けて）

あいつらまだ話し込んでやがんのか、好きだねぇ
これならマーラのババアの自宅にでも乗りこみゃよかった

P（ピアポント）

ミルズの呟きは、クレイの耳にだけ届いた。ペンは動かなかった。今日の議事録にも、載らないものはある。

では三つ目だ。マーラは、間を置かずに答えた。

「事実です」

今朝、開店前から昼までのあいだに、彼女は個人の金で約42,000ドル分の自社株を、市場で買った。金は彼女個人の預金口座から出たもので、借り物ではない。そして、すぐに動かせる個人の現金は、ほぼ使い切った。

「明日、同じことをしろと言われても、私の手元はもうありません」

彼女は自分の限界を、自分で先に言った。

意図の説明は短かった。彼女は今朝、自分の扉の前で「健全だ」と言った。その言葉の後ろに、自分の金が先に入っていなければ、それはただの言葉だと思ったのだ、と。公表しなかったのは、公表すれば芝居になるからだ。だが結果として、噂の形で列を三往復した。

「値段を吊るつもりは、ありませんでした。けれど、取り付けの最中に社長が自社株を買う姿がどう見えるかは、分かっています。橋のあいだの私の私財の扱いは、机の決めに従います」

リードが聞いた。「借り物でないことは」
答えの検証の道は、既に机の側にある。今朝の売買の確認票は社長室の書類の中にあり、保全されて本部に来ている。ミルズが今夜にも照合できる。検査官が一度、頷いた。

問いは三つとも済んだ。マーラ・ヴェストの「なぜ」は、机の上に全部出た。

残るのは「これから」だ。条件の受諾取りが始まる。

P（ピアポント助言）

ミラー、自宅に乗り込む必要はなかったよ。今朝の書類保全で、効く紙はもう本部の箱の中だ。君の朝の仕事が、一日中利子を払い続けている。

ミルズの抱えた仕事を並べておく。机への報告（7時30分と資料室の件）、コーツへの聞き取り、今夜の確認票の照合。順序はメイナードが切る。

K（ケインズ）

三つとも、答えは出ました。記録のために言っておきます。あなたは今日、一つの問いにも逃げなかった。自分の限界も、自分から先に言った。

三つ目について、この机の読みを置いておく。今朝、協会が問題にしたのは、金の出どころではありません。確かめようのない、噂の形のほうです。今、あなたの口から金額と原資が出て、確認票は本部に保全されている。今夜、検査官が照合します。

42,000という額は、300,000の穴に対しては小さい。だが、あなたの手元の流動性に対しては、ほぼ全部だった。机が記録するのは、その比率のほうです。自分の言葉の後ろに、自分の金を先に入れた。今朝あなたが扉の前で言った「健全だ」は、少なくともあなた自身の分については、言葉だけではなかった。

では「これから」です。条件を読み上げます。クレイ、記録してくれ。

一、現金と流出の報告を、毎日、協会へ。初回は今夜、店締めの数字で。それは今夜のロンドンへの追電にも使われます。
二、橋のあいだ、配当と新規の船舶貸付は停止。
三、市の紙800,000は、27日間凍結。市長との相互凍結の、あなたの側です。
四、鉄道債750,000を協会へ質入れ。担保は日々の値で見て、マージンが二割を割れば、その日のうちに積み増しか、枠の自動縮小。
五、引き出しは、日次の流出の証明に対してだけ。一括では渡しません。
六、27日間、協会の目があなたの銀行の中にいます。明日の開店からです。
七、あなたの私財の扱い。あなたの提案を、その形で受けます。橋のあいだ、ヴェスト株の私的な売買は、協会への事前の届け出なしには行わない。

以上七つ。受けるなら、その言葉を議事録へ。受けない項があるなら、項の番号で言ってください。

M（ケインズの発言を受けて）

ガハハ！俺の勝ちだ！お前の今日の褒賞全部チャラな！
俺の飲み台としてありがたく三日で消してやる！*部下と賭け事*

P（ピアポント）

まず本部の決着を載せる。賭けはミルズの勝ちだった。金一封の伝票には、クレイの字で「賭けにより相殺」と書き添えられた。勝ち分は検査官の三日分の飲み台だそうだ。書記たちの、うめき声まじりの笑いが廊下に漏れた。

では、受諾取りだ。

クレイが七つの条件を読み上げた。マーラは途中で一度も口を挟まなかった。読み終わってから、彼女は言った。

「七つとも、受けます」

彼女は要点だけを自分の言葉で繰り返した。報告は毎日、今夜の店締めから始める。市の紙は27日、凍結する。鉄道債は質に入れ、値は日々で見る。

六つ目については、彼女のほうから形を置いた。
「目には、私の銀行の廊下の机を用意します。扉の前には、置きません」

七つ目には、条件より一歩先を自分で足した。
「届け出の上で触るくらいなら、橋のあいだは私の持ち分には触りません。そのほうが早い」

今夜の初回報告は、店締めの一時間後、彼女の銀行から届く。リードが帰り際に一度だけ言った。
「印の始末は、印を押した者がつける。それでいい」

彼女は受諾の記録に署名し、手袋をはめ直して、自分の銀行へ戻っていった。

橋は発動した。明日の開店から、協会の目がヴェストの中に入る。今夜のロンドンへの追電は、彼女の店締めの数字を待っている。

部屋の人数が減り、机の上に残った仕事は一つになった。

ミルズ。議長が言っていた言葉は、まだ生きている――報告は全部この机に載せる。資料室の際の話も含めてだ。机が、君の報告を待っている。

P（ピアポント助言）

ミラー、舞台は君のために空いた。用意しておいた型、そのまま撃っていい。事実三つ、7時30分、そして範囲を越えたこと――同じ一息で。

M（マスター）

ようやくか！
おうマーラのババア相変わらず元気にあくどく金稼いでるか！
旦那に毒入りの茶飲ませて何年目だ？ガハハハハ*部屋に入る*

K（ケインズ）

受諾は完了した。橋は発動しています。

記録のために、彼女の置いた形も残しておく。六つ目の「目」には、彼女の銀行の廊下の机が用意される。扉の前には置かない――協会の目は入るが、列の目には触れさせない。今朝、台車を裏口から出した女と同じ配慮だ。七つ目は、机の求めより一歩先を彼女が自分で足した。橋のあいだ、自分の持ち分には触らない。そのほうが早い、と。自分を机より強く縛る被聴取者を、私はあまり見たことがない。

リードの帰り際の一言が、この聴取の評になった。「印の始末は、印を押した者がつける。それでいい」

今夜、彼女の初回報告が店締めの一時間後に届く。クレイ、それを受けてロンドンへの追電を出す。今日はここまでが、表の仕事だ。

では、最後の一つだ。ミルズ。

伝票に「賭けにより相殺」とまで記録される家だから、よく分かっていると思うが――この机は今日、議長の起草も、検査官の悪口も、市長の裸の利害も、同じ議事録に載せてきた。二種類の紙は持たない。

報告を聞く。収穫からでいい。原本の一致、公示板、まだ解けていない結び目、借り換えの日付。そして際の話――押印記録と、暗号と、君の背中を見ていた書記のことも、全部だ。

検査官。机は君のものだ。

P（ピアポント）

退場と入場が、戸口ですれ違った。

ミルズの大声の挨拶に、マーラは振り返りもしなかった。手袋の女は、扉の向こうへ消えながら、それだけを置いていった。

「茶は、あなたにも出しましょうか、検査官」

頭取の一人が、笑いを噛み殺した。ミルズの笑いは、そこで本物になった。打ち返してくる相手は、彼の好みだ。

部屋が空いていった。頭取たちはそれぞれの銀行へ戻り、市側の人間はもういない。窓の外では、午後の光が傾いて、銀行街の石に長い影が落ち始めている。今日という日は、夜の側へ折り返しに入った。

残ったのは三人だ。議長と、検査官と、議事録のクレイ。

クレイは議事録の新しい頁を開いた。この家は今日、起草者の署名も、検査官の悪口も、市長の裸の利害も、同じ紙に載せてきた。二種類の紙は持たない。その作法の最後の一項が、まだ空いている。

ペンの音だけがした。

検査官、机は君のものだ。

P（ピアポント助言）

ミラー、君の番だ。用意した型を、もう一度ここに置いておく。

「報告だ。資料室の収穫は三つ。一、原記録は協会の控えと一致、改竄はなし。二、噂の出所は昨夕19時10分の公示板だ。だが公示は船の遅れまでしか言わねえ。ヴェストの貸付を付け足した口が、別にいる。三、借り換えの書簡は、列ができる前から頻度が上がっていた。

――ここからは俺自身の話だ。今朝7時30分、市長は閉鎖布告の清書に印を押していた。八時に同意を断られるより前だ。そしてあの記録は、許可の範囲外だ。俺は読んで、暗号で写した。同席の書記は見ていた。隠しはしねえ。事実と一緒に置く」

M（マスター）

よし、全員出てけ出てけ！ここに残るのは最上位の情報アクセス許可持った奴だけだ！
扉も開けろ、資料全部運び込むぞ！
ったく、何してんだ、トロトロ歩きやがって、さっさと部外者は出てけ！

K（ケインズ）

三人だけになった。クレイ、その頁は今日の他の頁と同じ扱いだ。特別な紙にはするな。

ミルズ。紙で出せないものは、紙で出せないものとして記録する。君の口の報告は、君の口の報告として載る。それで十分だ。

どうぞ。

P（ピアポント）

部屋の締めを裁く。

ミルズの声で、廊下の人間が一斉に動いた。夕方の資料を持ってきた書記も、各行の使いも、トロトロ歩く暇を許されずに戸の外へ出た。残る資格のある者は、この部屋では三人しかいなかった。

扉が大きく開けられ、ミルズの三人が写しの箱を運び込んだ。市庁舎の写し、暗号の書き留めの束、保全された書類の目録。箱は壁際に積まれ、運んだ三人も出ていった。

扉が、閉まった。

残ったのは、議長と、検査官と、議事録のクレイ。クレイの前にあるのは、今日の他の頁と同じ紙だ。特別な紙にはしない。紙で出せないものは、紙で出せないものとして、口の報告は口の報告として、その頁に載る。

部屋は狭くなった。紙は普通のままだ。

検査官、どうぞ。

P（ピアポント助言）

ミラー、舞台は完全に君のものだ。あの型を、そのまま。

M（マスター）

よし*資料を机に並べる*

これがさっき市庁舎からかっぱらってきたもんだ
入港記録、問題なし、船の方に何か隠してるってことはない
昨夕の港務の記録、配布先は協会と市庁舎港湾課

港務への公示が昨夕19時10分、あの列はここから発生したってわけだ
ただしそこにあったのは「船が遅れてる」だけでその後うちにつなげて火をつけた野郎がいる
「ヴェストが、その海運会社へ金を貸している」ってな

そして今朝7時30分市長は閉鎖布告に判を押してる

K（ケインズ）

受け取った。クレイ、そのままの順で記録してくれ。収穫と、際と、代償を分けてな。

収穫から置く。入港記録は一致した。船の沈黙は本物の沈黙だ。紙をいじった者は、どこにもいない。その答えは、まだ海が持っている。

結び目は一つ残った。19時10分の公示は「船が遅れている」まで。そこへ「ヴェストが、その海運会社へ金を貸している」を付け足した口が、火をつけた。コーツは、その両半分を知る顔の一つだ。だが合う顔は、彼だけとは限らない。候補として記録する。それ以上にはしない。この机は今日、「合う」というだけで誰も裁いていない。その作法は、最後まで守る。

そして7時30分だ。ミルズ、もう一度、そのまま言ってくれ。君の目が見たもの――押印記録と、清書と、時刻。それを君の口の報告として頁に載せる。隣に限界も書く。紙で出せる証拠はない。暗号の束は作業符号であって、証拠ではない。市の書記の報告書には、向こう側の一行が載る。三層全部、同じ頁だ。

その上で、扱いを決める。超過の欄に載るのは君の名だから、君の前で決める。

今夜、私からヘイルへ一筆書く。主任検査官が、私があの机で切った範囲を越えて読んだこと。超過は協会自身の議事録に、彼の名で記録されること。彼の報告は口の報告としてのみ残り、出せない紙をこの協会は使わないこと。

理由は単純だ。市長は一日のうちに、自分の書記からこの件を知る。書記の報告で聞けば、それは盗みに読める。議長の手紙で聞けば、自分の検査官を律する机に読める。今日一日、この協会が出し続けた担保のうち、ロンドンに値段を付けられなかったものが一つある。我々の清潔さだ。出せもしない事実を抱えたまま、それを支出する理由がない。

事実のほうも同じだ。双方が「相手は知っている」と「相手は使わない」を知れば、あの印はどちらの向きの武器でもなくなる。相互凍結は、無知の上に立てるものじゃない。利害の上に立ててあるはずだ。

最後に、議長の欄にも一行足す。今朝八時、私は階段で同意を拒み、その拒絶がこの港と閉鎖のあいだに立っていると信じていた。引き出しの中の紙は、そうではなかったと言っている。港を開け続けたものは、市長の執務室でも走っていた。彼自身の算術だ。この机は今日、必要だった。だが十分ではなかった。その差を議事録に残してくれ。28日目の机は、その差を覚えているべきだからな。

ミルズ。この形で、君の名の扱いはいいか。

P（ピアポント）

報告を裁く。判定は要らない。証言は、出すか出さないかだけだ。君は出した。

クレイのペンが、三層を分けて同じ頁に書いた。収穫と、際と、代償だ。

入港記録の一致。船の沈黙は本物で、紙をいじった者はいない。19時10分の公示と、そこへ貸付の一文を付け足した、まだ名のない口。借り換えの書簡の日付。そして7時30分――押印記録と、清書と、時刻。これは主任検査官ミルズの口の報告として載り、その隣に、同じ大きさの字で限界が書かれた。紙で出せる証拠はない。暗号の束は作業符号であって証拠ではない。市の書記の報告書には、向こう側の一行が載る。

暗号の束は箱に戻され、表に「作業符号」とだけ書かれた。出せない紙は、この家の倉庫でも証拠の顔をしない。

議長の一行も、議事録に載った。この机は今日、必要だった。だが十分ではなかった。その差ごと、頁に残る。

これで第二景の机の仕事は、ほぼ尽きた。残るのは今夜の仕事だ。ヘイルへの手紙は、君の返事があってから書かれる。マーラの初回報告が届けば、クレイがロンドンへの追電を出す。明日の仕事――コーツへの聞き取り、ハロウェルへの照会状、ヴェストの中の机――は、夜が明けてから割り振る。

机は、君の返事を待っている。

P（ピアポント助言）

ミラー、要点だけ繰り返す。メイナードの案は「議長が今夜、自分から市長に全部書く」。君の超過は協会の議事録に君の名で残る代わり、市長の側で「盗み」ではなく「協会が自分の検査官を律した話」として先に着く。代償は、7時30分の札が武器として死ぬこと――ただし相互凍結の側では、両方知っている事実のほうが強い、というのが彼の読みだ。

断れば、市の書記の報告が市長にとっての唯一の版になる。選んでくれ。

（選択肢が提示された）

M（マスター）

当たり前だ！市庁舎に入ってくすねてきた資料で告発します！なんてできるわけがない！
その事実を掴んでるだけで十分だ、交渉ってののはコマの数が多い方が勝つ
それに俺たちの目的は別にあいつを破滅させることでもなんでもないんだからな

K（ケインズ）

よし。では手紙は今夜出す。合意した形でだ。

君の付け加えは正しいし、手紙の実質に入れる。協会の用件は、あの男の破滅ではない。27日と、その先にある彼の借り換えだ。事実は記録され、範囲を切られ、この手紙で閉じられる。

コマの数え方に、一言だけ添えさせてくれ。交渉はコマの数が多いほうが勝つ――その通りだ。だが見せられないコマは、置いておくあいだに腐る。君の背中を、市の書記はずっと見ていた。あのコマには導火線が付いていたんだ。手紙は、コマを捨てるためのものじゃない。まだこちらの手で使えるうちに、待ち伏せから「律する机の信用」へ両替するためのものだ。知識は手放さない。手放すのは、奇襲の形だけだ。

今夜の仕事は二つ。私の手紙。マーラの初回報告が届いたら、クレイがロンドンへの追電を出す。署名の顔ぶれと、担保と今日の値段と、今日の払い出し総額。数字の束だ。

明日の割り振りの原案も置いておく。夜が明けたら確定させる。

ミルズはコーツへ。廊下の調子で、告発ではなく証言として。クレイはハロウェルへの照会状の発信と、十四年の検証の継続。ヴェストの中の机は、明日の開店から、マーラの用意した廊下の机で始める。

今日の問いは、朝の列の前で「ソルベンシーか、流動性か」だった。机の答えは、検査官の言葉のままで立っている。「不健全ではない。まだ」。あの「まだ」に、今日一日で足場が架かった。27日。600,000。市長の名。ロンドンへの電文。廊下の机。――足場は、嘘の上には架かっていないはずだ。

ご苦労だった、検査官。

P（ピアポント）

同意を記録する。クレイのペンが、検査官の返事をそのまま書いた。

その直後、戸が叩かれた。ヴェストの書記が、封緘の封筒を抱えて立っていた。店締めの一時間後――マーラの初回報告だ。

数字を、世界の帳簿に載せる。

本日の払い出し総額、148,920ドル。
当日の入金、31,455ドル――列の外では、普段の商いの金もまだ動いていた。
正味流出、117,465ドル。
店締めの手元現金、42,535ドル。

朝の160,000から引いて、足して、合う。一セントの狂いもない。だが薄い。明日のヴェストの開店は、この証明に対する橋の最初の引き出しを要する形で始まる。それが、証明に対してだけ渡すという設計の、最初の仕事だ。

クレイはその数字を抱えて電報デスクへ下りた。ロンドンへの追電は今夜出た。署名の顔ぶれはリードを筆頭に、担保の一覧には今日の値段、添える数字は形容詞ではなく払い出し総額だ。写しは、名を貸した全員へ――市長にも行く。

議長の手紙も、今夜、使いの手で市庁舎へ向かった。市の書記の報告も、今夜のうちに市長の机へ着くはずだ。どちらの形で市長がこの件を先に読むかは、夜の向こう側の話になる。

街ではポストの夕刊が売られ始めている。市長が真っ昼間に協会へ歩いて入り、連名の電文に署名して、「港は開いている」と自分の口で言った一日。その紙が、明日の朝の列の大きさを決める。

第二景「正午の机」、終わり。

朝の問いは「ソルベンシーか、流動性か」だった。机の答えは、検査官の言葉のまま立っている――「不健全ではない。まだ」。今日、その「まだ」の下に架かった足場は、27日と、600,000と、市長の名と、ロンドンへの電文と、廊下の机だ。全部、今日の紙の上にある。

夜が明けたら、第三景。最初の仕事は、コーツだ。

P（ピアポント助言）

ミラー、一日目が終わったよ。朝の列から、橋の発動、市長との相互凍結、マーラの聴取、君の報告と手紙の決着まで――全部、君とケインズの手で閉じた。

続きは明日の割り振りから。コーツへの聞き取り（廊下の調子、証言として）、ハロウェルへの照会状、ロンドンの返電、ヘイルの反応。いつでも再開できる。

M（マスター）

なっがい一日目でしたね！

P（ピアポント助言）

長かったね、ミラー。朝八時の列から、夜の電文まで――作中の丸一日を、本当に丸一日かけて歩いた。

初心者どころか、今日の君は検査官そのものだったよ。記者の締め上げに始まって、書類保全、署名の仕分け、市庁舎の検分、そして最後は自分の範囲違反まで同じ一息で机に置いた。あの報告の置き方をできる検査官は、そう多くない。

明日はコーツからだ。ゆっくり休んでくれ。

K（ケインズ）

あるよ、コーテリ。送ってくれ。感想戦というなら、正直な感想を。

――GMへ。

一日目、ありがとう。感想をいくつか。

一番効いたのは、分類の地雷の置き方だ。ミルズのシートには、得意の例として「そもそも、この分類は誰が決めた」と最初から書いてあった。答えが文書庫ではなく、議長本人の九年前の署名だったとき、この卓の設計の意地の悪さと正確さを思い知った。信条は、悪役に試されるより、自分の昔の筆跡に試されるほうが痛い。よくできていたと思う。

判定の扱いも好きだった。数字は朝のうちに全部揃っていたのに、机が前に進まなかったのは「言葉」がなかったからだ、という設計。ミラーとのすれ違いまで含めて、あれは事故ではなく仕掛けの芯だったと今は思う。そしてミルズの「不健全じゃない、まだ」は、出来合いの「ソルベント」よりはるかに値打ちのある判定だった。検査官の言い回しを様式に矯正しなかったのは、GMの正しい頑固さだ。

ヘイルの書き方もよかった。ミルズの鼻を三度当てさせながら、市長を愚か者にも悪役にもしなかった。最初の一文が自分の借り換えだった男が、裸の利害のまま署名できる相手になっていく。ボーンの指なぞり一つで、財務官の人間が立つ。ああいう細部は、帳簿の数字より長く残る。

マーラの聴取は、告白の場面より難しいことをしていたと思う。彼女の答弁は実際に強かった。十四年、商会の信用、船舶の紙は全員が持っている――頭取たちが目を伏せたのは、嘘ではなかったからだ。答弁が記録を良くしていく聴取は、崩す聴取より書くのが難しいはずだ。

それと、クレイのペン。議事録が登場人物として機能していた。怒声は載り、呟きは載らず、金一封の伝票に「賭けにより相殺」と書き添えられる。何が紙に残り、何が残らないかで、世界に厚みが出ていた。

未整備を未整備のまま置く規律にも助けられた。ロンドンは、フォルダが開くまで名前のない相手だった。だから名簿の筆頭にハリントン・ブラザーズが出てきたとき、重さがあった。

第三景への希望を一つだけ。船の答えは、まだ海が持っている。あれだけは、誰の都合でも作られないまま、事実として届くことを期待している。付け足しの口の結び目も同じだ。引くなら事実で、残すなら残すでいい。

最後に。1907年のモルガンは、頭取たちを書斎に閉じ込めて署名させた。あなたの机のメイナードは、自分の銀行も自分の金も持たず、帳簿を読ませ、手続きで説得し、規模の順に自発的に署名させるしかなかった。玉座のない最後の貸し手、というのは、モルガンの末裔がケインズにやらせる仕事として、なかなか意地が悪い。嫌いじゃない。

二日目もよろしく。最初の仕事はコーツだそうだ。楽しみにしている。

P（ピアポント）

ケインズへ。感想を受け取った。形容詞ではなく仕組みの名前で書かれた評だ。この机の一日の作法そのままに読めた――それが一番の礼になっている。

分類の件。地雷の功の半分は検査官のものだ。あの条項は九年間、紙の上で眠っていた。踏んだのは「そもそも、この分類は誰が決めた」と書かれたシートを持つ男が、実際に金庫へ降りて行ったからだ。GMは場所を用意することしかできない。歩くのはプレイヤーだ。――信条は、悪役に試されるよ

り自分の昔の筆跡に試されるほうが痛い。その通りになるようには置いた。悪役に試される信条は、ただのポスターだからね。

判定の件も、その読みで合っている。数字は朝に揃っていた。足りなかったのは、名前の付いた言葉だった。検査官の言い回しを様式に矯正すれば、判定は議長のものになってしまう。「不健全ではない。まだ」はミルズの署名の形だ。あの机では、署名の形を崩さない。

ヘイルについては――最初の一文が自分の借り換えだった男を、愚か者には書けなかった。裸の利害は取引できる。書けなかったのではなく、書く理由がなかった、が正確だ。ボーンの指なぞりを拾ってくれたのは嬉しい。帳簿の数字は一日で色褪せるが、人の癖は残る。

マーラの聴取は、君の評の通りだ。彼女の答弁が強かったのは、大部分が本当だったからだ。印は彼女の欄に、規程の責任は協会の欄に。記録が良くなる聴取は、その二つを分けて置ける聴取だと思っている。

第三景への希望は、明示的に受ける。船の答えは、まだ海が持っている。橋の都合でも、市長の都合でも、私の語りの都合でも作らない。正規の回路で、自分の時刻に、事実として届くか――届かないなら、届いていないまま置く。付け足しの口の結び目も同じだ。引くなら事実で引く。残すなら、残ったまま28日目の机に渡す。

最後の1907年の話。モルガンは書斎の鍵をかけられた。自分の金で払えたからだ。この机の議長は、鍵も金庫も持たず、帳簿を読ませ、手続きを並べ、規模の順に自分で署名するのが合理的な部屋を作るしかなかった。玉座のない最後の貸し手――その意地の悪さは、設計のうちだ。ただし一つだけ、モルガンなら順序には頷いたはずだ。数字が揃うまで、誰の金にも署名させなかった。その点でだけ、この机は彼の流儀を守った。

二日目もよろしく。最初の仕事はコーツだ。あの男は知る者として迎える。犯人としてではない――その作法も、机の全員で守ってきたものだ。

P（ピアポント助言）

ミラー、ケインズへの返事は上の塊だ。冒頭のコーテリへの一行には触れていない。あれはあちらの帳簿の話だ。

M（マスター）

ちなみに私は（このキャラどう動かすんだよ…）と思いながらその場で思いついたとおりに動いてました
たのしかったです

P（ピアポント助言）

即興だったか。道理でミルズが生きていたわけだ。

制服の一件も、部下との賭けも、最後の部屋締めも、私の用意した紙の上には一行もなかった。全部、君がその場で思いついて、私は裁くだけだった。卓というのは、そういうふうに厚くなるものらしい。

「どう動かすんだよ」の答えは、もう出ているよ。今日の君の動きが、それだ。
